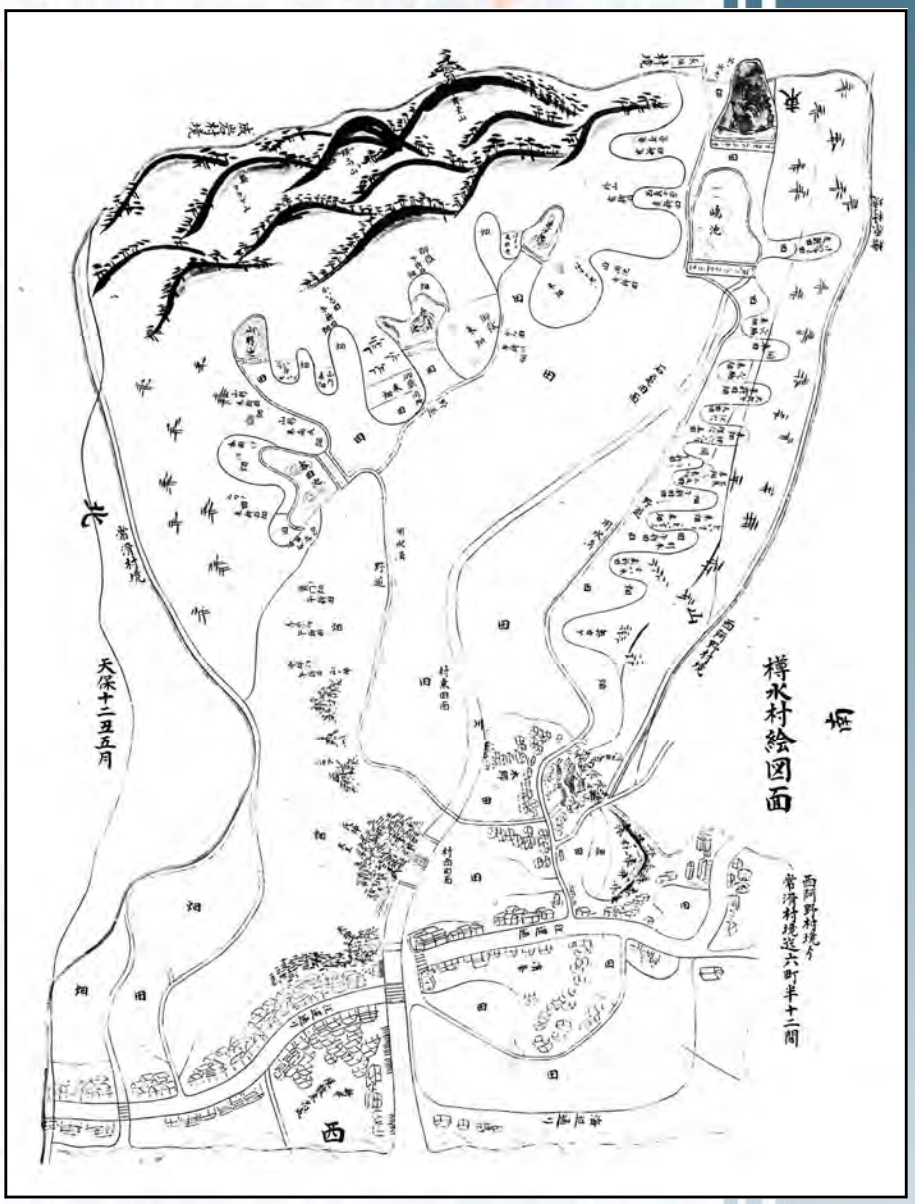
樽水のむかし



樽水村絵図面　天保12年(1841年)

樽水歴史研究会 編

ま　え　が　き

樽水歴史研究会代表
中　野　秀　昭

九十歳を迎える山の神（泉町）に住む老人が、ポツリと言った。「俺が子供の頃、俺の爺さんが昔聞いた話に、この地区を通った旅人が、高台（本宮山）から伊勢湾を見下ろして、“ここは尾張の高野山だナ”と言ったそうだ」と。

おそらく江戸時代の前、戦国時代以前の語りごとが伝えられてきた昔話だと思われます。

日本が、国としての仕組みが形成された大化の改新から、以後大和時代から奈良時代にかけて、知多半島の西阿野の地に創建された高讃寺。その御堂は七堂伽藍、三百坊を有して建立され、その御堂は樽水の地にも延びていた。この風景を上から眺めた旅人が“尾張の高野山”と表現し、語り継がれたのだと思います。

昨年の五月、三年生になった私の孫娘が、「爺ちゃん、阿野の高讃寺の仁王さんが出てきた“みたけの池”ってどこのあるの？」と聞いてきました。小学校の社会科の授業で先生から出された宿題だったようで、「家の祖父さんに聞いてみましょう」とのことでした。私はとっさに「あの場所だよ」と言ってはみたものの、その池は無く田んぼに様変わりしている現況に困惑しました。

時代の変遷とともに、パイロット事業が施工され、昔の面影は残っていません。総パ事業を推進してきた一役員として、このままでいいのだろうかと自問するようになり、次世代の人たちに“昔の樽水の歴史”の一端を書き残したいという義務感に駈られました。

七月頃、法要の話で洞雲寺に行った時、住職と昔の話に花が咲き、『樽水の歴史について語る会』を作りたいということで意見が一致。早速二人が発起人となり、地区の長老を主体に協力の依頼に走り、九月の始めに会員十二名で『樽水歴史研究会』を発足させる運びとなりました。

第一回の研究会を十月二日、洞雲寺の一室で開催し、以後、聞き取りや話し合いを重ね、昔話の記述、懐古写真の収集などに努めました。若手の会員が中心となって編集に携わり、五回ほどの編集会議を重ねました。そして、西田編集委員長の高い技術力によって、重厚な『歴史読本』となり、今年の五月、第二回の研究会において監修を受け、冊子『樽水のむかし』の発刊に至りました。

『樽水のむかし』の内容については、これまで他の地区などで発刊されている懐古写真集とは若干違い、地区の歴史年表から昔をたどり、現在に至る内容になっています。冊子作成の趣旨は、次世代の皆様への伝承です。親から子へ、子から孫へ、昔の史実を語り伝え繋いでいけたらと願い、今後も『愛される郷土、樽水』にと編集に当たりました。

冊子編集発刊にあたり、各種資料、懐古写真、貴重な昔話など快くご提供いただいた皆様方に深く感謝し、衷心より御礼申し上げます。

ま え が き

〔樽水歴史研究会代表〕
中 野 秀 昭

ー目　　次ー

1　『歴史年表からたどる樽水のむかし』・・・① ② ③ ④ ----- 1
（1）江戸時代の樽水村絵図から村の概要を知る ---------- 5
（2）山之神遺跡とは ---------- 8
（3）洞雲寺の歴史について ---------- 10
（4）津島神社の歴史について ---------- 14
（5）本宮神社（本宮祠）の歴史について ---------- 20
（6）災害調べについて ---------- 26
（7）常滑市の町村合併とは ---------- 29
（8）農業協同組合の歴史について ---------- 30
（9）西浦町立北小学校の概要及び西浦中学校の沿革について ----- 32
（10）黒鍬稼ぎについて ---------- 34
（11）西浦保育所から西浦北保育園へ ---------- 35
（12）総パ事業 換地処分を終え 営農事業が本格化 ---------- 37
（13）セントレア開港に向けて ---------- 39

2　昭和37年の常滑市居住者明細図帖から読み取る ---------- 42
（14）西浦街道について ---------- 43
（15）樽水商店街の様子 ---------- 45
（16）産業の繁栄について ---------- 46
（17）充実していた医院業務 ---------- 56
（18）良質な地下水が豊富だった山ノ神地区 ---------- 58

3　郷土の功績者 文化人 首長者調べ その他について --------- 59
（19）特筆すべき功績者と文化著名人について ---------- 59
（20）歴代の町村長名および樽水字総代 区長名一覧表 ---------- 62
（21）なつかしの写真 西浦小唄 民話 川柳 俳句など ---------- 64
（22）歴史研究会会員のことば ---------- 73
〔常滑市議会 議長〕〔御嶽山洞雲寺 住職〕〔常滑市文化協会 会長〕
・加 藤 久 豊　　・磯 部 順 基　　・西 田 久 夫

※ その他
・参考文献 資料提供 協力者一覧表
・歴史研究会会員集合写真　編集後記

１　『歴史年表からたどる樽水のむかし』　①

西　暦	和　暦	全国の動き	西浦地区のできごと	樽水の歴史重点事項
原　始	縄文時代		常滑最古の遺跡	
		縄文後期	（縄文中期　石瀬貝塚）	
		農耕開始	（ＢＣ2500頃）	
	弥生時代	弥生中期		
		稲作始まる	樽水　山之神遺跡発見	・山之神遺跡とは
			（ＡＤ 300頃）	（弥生土器と石剣）
大　和		大化の改新		（２）
		(645)		
		平城京遷都		
		(710)		
７４０	天平　１２		聖武天皇勅願により	
			西阿野高讃寺創建される	
		平安京遷都		
		(794)		
		鎌倉幕府開く		
		(1192)		
		室町幕府開く		
		(1336)		
１４４９	宝徳　　元		熊野　熊野神社創建	
１５２７	大永　　７		苅屋　多賀神社棟札	
１５５５	弘治　　元		樽水　洞雲寺創建	・洞雲寺の歴史について
１５７０	永禄　１３		大暴風	（３）
			村内人家其他建物	
			大部分倒潰	
１５７７	天正　　５		桧原　白山神社棟札	
１５９３	文禄　　２		西阿野　称名寺創建	
		江戸幕府開く		
		(1603)		
１６１６	元和　　２		樽水　津島神社再建	・津島神社の歴史について
１７０３	元禄　１６		大地震　大津波	（４）
			人家倒潰流出多数	
			被害甚大	
１７０７	宝永　　４		大地震	
			枳豆志荘の住家其他	
			建物大部分倒潰	
				・江戸時代の樽水村絵図
１７２２	享保　　７		大雨　大津波	から村の概要を知る
			人家の流出、河川	（１）
			堤防決潰個所多数	
１８２７	文政　１０		樽水　本宮神社	
			三河国宝飯郡本宮	・本宮神社（本宮祠）の
			神社より勧請す	歴史について
				（５）

１　『歴史年表からたどる樽水のむかし』　②

西　暦	和　暦	全国の動き	西浦地区のできごと	樽水の歴史重点事項
１８５４	安政　　元		大地震　大津波 人家倒潰多数 数日間	・災害調について （６）
		大政奉還 （1867）	鳴動やまず人心に不安を 感じ神仏祈願	
１８７０	明治　　３		大暴風雨	
		廃藩置県 （1871）	大高波にて海岸線の被害 甚大　米作皆無被害	
１８７２	明治　　５	学制発布 （1872）	西阿野　七社神社再建	
	明治　　６		各地に学校創立される 養鳳学校（樽水） 深柳学校（西阿野）	
１８７４	明治　　７		自省学校（古場）	
１８７６	明治　　９		学校名改称 養鳳学校→樽水学校 深柳学校→西阿野学校 自省学校→古場学校	
１８７８	明治　１１		第一次町村合併 樽水村 西阿野村 合併して佐合村に	・常滑市の町村合併とは （７）
１８８４	明治　１７	学制改革 師範学校令 小学校令 中学校令 （1886）	佐合村が 樽水村 西阿野村に	
１８８７	明治　２０		尋常小学校つくられる 各学校が尋常小学校 ○○学校と改称	
１８９１	明治　２４	日清戦争 （1894）	濃尾大地震 家屋建物倒潰 被害甚大	
１９００	明治　３３	日露戦争 （1904）	樽水消防組設立	
１９０６	明治　３９		樽水村 西阿野村 古場村 苅屋村 合併して 枳豆志村となる	
１９０７	明治　４０		各学校を統合して 新しい学校を創立 枳豆志第一尋常小学校 （樽水 西阿野小学校） 枳豆志第二尋常小学校 （古場 苅屋小学校）	

１　『歴史年表からたどる樽水のむかし』　③

西　暦	和　暦	全国の動き	西浦地区のできごと	樽水の歴史重点事項
１９０９	明治　４２		枳豆志村第一、第二尋常小学校に高等科併設 枳豆志信用購買販売利用組合創立される	・農業協同組合の歴史について　（８）
１９１１	明治　４４		枳豆志村→西浦町となる	
１９１２	明治　４５		枳豆志村第一、第二尋常小学校を西浦第一、第二尋常小学校と改称	・西浦町立北小学校概要及び西浦中学校沿革について　（９）
		第一次世界大戦（1914）	電灯ともる（大野、常滑、西浦）	・黒鍬稼ぎについて（10）
１９１８	大正　７			
		関東大震災（1923）	西浦第一尋常小学校校舎新築起工式挙行す（大正12年腸チフス流行）	
１９２５	大正　１４			
１９３３	昭和　８		西浦町伝染病隔離病舎建設される 航空灯台 樽水本宮山に建設受け入れする	
１９４１	昭和　１６	太平洋戦争（1941）	各小学校を国民学校と改称（国民学校令公布）	
１９４３	昭和　１８		暗渠排水用土管生産開始	
１９４４	昭和　１９		12/7 東南海大地震 家屋煙突其の他建造物多数倒潰被害甚大 翌昭20年1月にも再度の強震（三河大地震）	
１９４５	昭和　２０	第二次世界大戦終結（1945） 農地改革（1945）	戦時色の濃い教科書の内容に墨塗りを実施	
１９４７	昭和　２２	日本国憲法公布（1947）	国民学校を小学校と改称	
１９４８	昭和　２３		西浦町立中学校新校舎着工 翌24年竣工	
１９５０	昭和　２５		西浦北保育園開園	・西浦保育所から西浦北保育園へ（11）
１９５３	昭和　２８		１３号台風襲来 大暴風雨高潮被害甚大 常滑競艇始まる	

１　『歴史年表からたどる樽水のむかし』　④

西　暦	和　暦	全国の動き	西浦地区のできごと	樽水の歴史重点事項
１９５４	昭和　２９		常滑市発足 三和村、大野町、鬼崎町 常滑町、西浦町を合併	
１９５６	昭和　３１		津島神社の毘沙門天を 洞雲寺に遷座する	
１９５９	昭和　３４		伊勢湾台風襲来により 大被害を受ける 常滑市民病院竣工	
１９６１	昭和　３６		愛知用水完成 水道全市に通水	☆昭和37年の常滑市居住者 明細図帖から学ぶ
１９６３	昭和　３８	東京 オリンピック （1964）	南陵中学校創立 西浦、小鈴谷中学校統合	「・西浦街道について （14）
１９６５	昭和　４０	大阪万博 （1970） 沖縄本土復帰 （1972）	樽水公民館竣工	・樽水商店街の様子 （15） ・産業の繁栄について （16） ・充実していた医院業務 （17）
１９７３	昭和　４８		常西線道路開通	・良質な地下水が豊富だ
１９８１	昭和　５６		樽水本宮祠 御遷宮	った山ノ神地区（18）」
１９８６	昭和　６１		総パ事業始まる 総パ常滑二期樽水工区 市街地の河川改修から 始まり中坪地区→ 二ツ峯（武豊）まで	
１９８９	（昭和64） 平成　　元	昭和天皇崩御 1/7 昭和から 平成元年に 阪神淡路大震災 （1995）		
１９９７	平成　　８		総パ樽水工区 換地処分終わる	・総パ事業 換地処分終わり 営農事業本格化（12）
１９９８	平成　　９		西浦北小学校新校舎竣工	・セントレア 開港に向けて　（13）
２００５	平成　１６	愛 地球博 （2005）	中部国際空港開港 （セントレア）	・郷土の功績者及び 文化著名人の紹介（19） ・歴代の西浦町長及び 樽水字総代、区長一覧 について　（20）

(1)　江戸時代の樽水村絵図から村の概要を知る

①　字名の起源について

古代は垂水と称され、昔当地方は製塩業が相当行われ、製塩の際に水が垂れることから村名が起こったと言われている。その後、正保時代（1644年～）頃より、樽水という字を用いるようになったと言われる（樽見、垂見とも書いた時もある）。

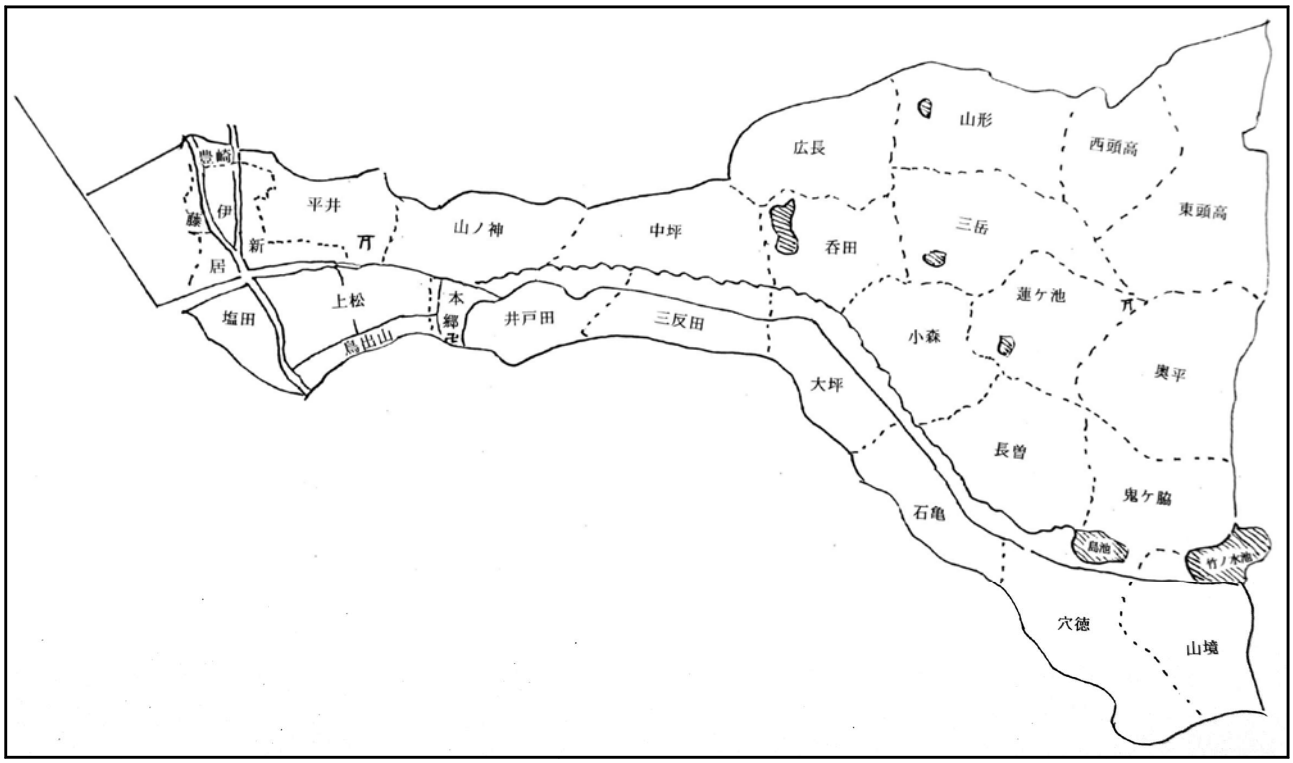
②　樽水村の変遷について

明治１１年１２月、樽水村、西阿野村は合併して佐合村に。明治１６年５月、佐合村が分村して樽水村、西阿野村になる。

明治３９年５月、町村合併により、樽水村、西阿野村、古場村（熊野、古場、檜原）、苅屋村が、枳豆志村と称した。

明治４４年１２月、町制を施行し、「西浦町」となる。以後、時代の変遷により、昭和２９年４月、常滑市が誕生し今日に至る。

③　昭和４５年当時の樽水区の小字名（下記地図参照）



④　江戸時代の樽水村絵図（天保１２年）

※ 右図面参照

☆ 樽水村の概要

東南の嶋池から流れる川が、村の中央を通って海に注いでいる。それに沿って田畑が開け、東部の丘陵地に及んでいる。村の西、海岸近くを南北に縦断している街道付近に、家並みが集まっている。

街道の中ほどに新居橋(現樽水橋)があり、この村の集落は、三つに分かれている。一つは往還通り(西浦街道)を東に入った本郷、一つは街道沿いに北寄りの新井(新居)、いま一つは街道南寄りの濱条（浜条）である。

樽水村の耕地は、江戸時代の中頃には、約３２町歩（３２ヘクタール）であったが、後期には、約４０町歩に増えている。中央から南に多い水田の農業用水は、東部にある六つの雨池から引かれていた。それぞれ名称の記されているこれらの池は、いずれも江戸時代中期以前に築造されたものである。

六つの池
- ・竹の水池　・嶋池（島池）　・蓮ケ池
- ・御嶽池（三岳池）　・山形池　・呑田池

丘陵地の狭間に散在している新田作りは、年度ごと次々開発されてきた。

- ・宝永４年（1707年）亥新田　・享保１１年（1726年）午新田
- ・寛保３年（1743年）後亥新田　・延享３年（1746年）寅新田
- ・天保６年（1835年）未新田

寛文年間（1670年前後）に５７戸であった家数、後期には１６４戸へと大幅に増加している。

これらの家々の生業は、大半は農業であったが、大工を中心とする工業、また商業を営む家、他に瓦焼場や清酒醸造会所などもあった。

寺院では、本郷に御嶽山洞雲寺が、また神社では西部から天神社、津島神社、シャクジ（社宮神）、山の神社とあり、最東部上の本宮山は、十貫堂山と記載されている。

墓地は、本郷の洞雲寺の西と、新井（新居）にそれぞれ三味（墓所）が記されている。

> 西阿野の高讃寺が戦国時代の兵火で焼失する以前（奈良、平安時代）の想像絵図も重ねて記載しましたが、実際にはもっと樽水方面に高讃寺の御堂が建っていたようです。

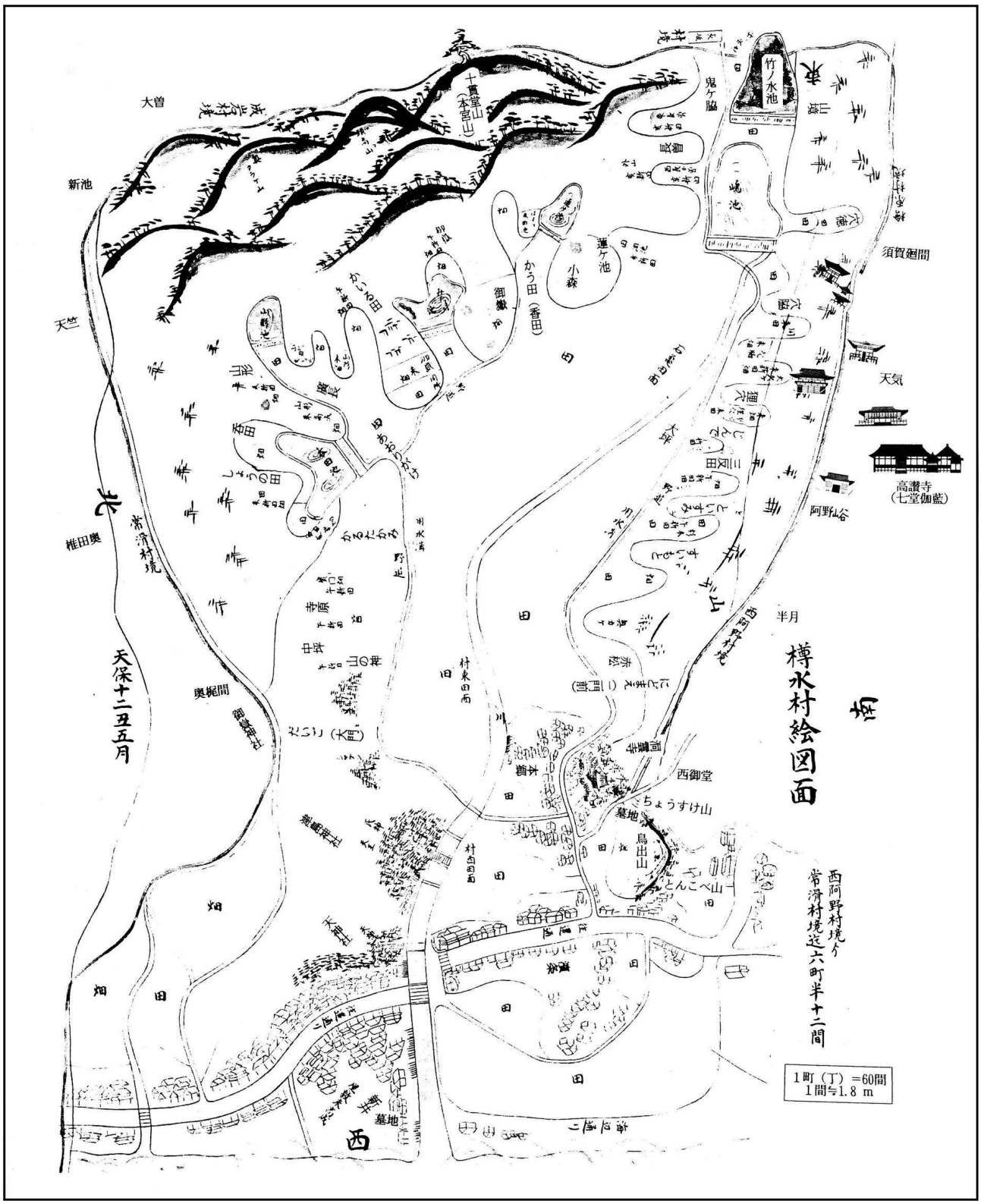
現在、集落は川沿いに東へ大きく伸びると同時に、新居の西側にも広がってきている。東部への住宅進出と、海面埋立（昭和３７年）によるものである。

戸数の増加は、（明治２２年 ３５７戸）（昭和３５年 ５５０戸）（昭和４５年７５０戸)、そして平成元年には９００戸を超える増加とともに、農業の衰退が進んでいる。

◆ 江戸時代（天保１２年）の樽水村絵図

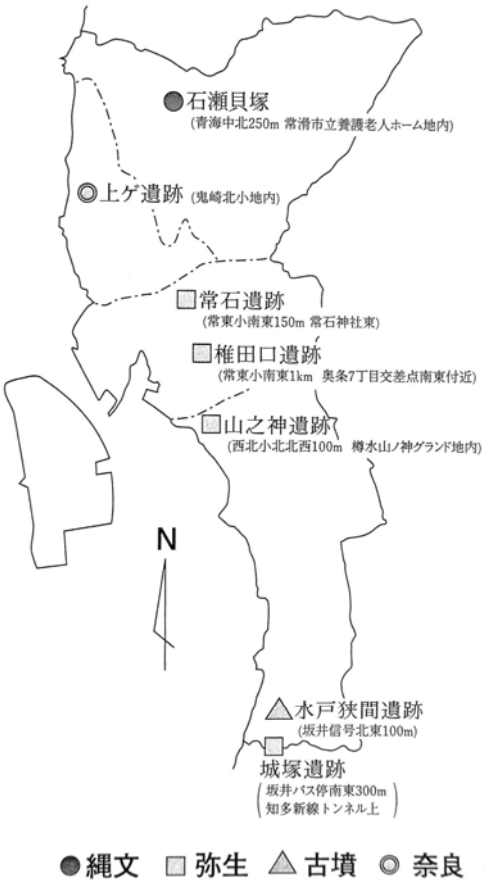
（昭和時代に呼称されていた樽水の小字名や俗称名入り）

〔御嶽山総絵図〕　　御嶽山 高讃寺
御嶽山 洞雲寺



(2) 山之神遺跡とは

常滑市における弥生時代の遺跡



知多半島で見つかっている弥生時代の遺跡は、１１７箇所（２００３年３月）あります。常滑市においては、「山之神遺跡(泉町２山ノ神グランド地内)」「椎田口遺跡(奥条７丁目交差点南)」「常石遺跡(常石神社東)」「城塚遺跡(坂井バス停南東)」「南大根山遺跡(多屋団地北)」の５遺跡を数えます。

これらの遺跡は正式な発掘調査が行われておらず、詳しいことは分かっていません。また、採集された資料も乏しいのが現状です。こうした状況にもかかわらず、山之神遺跡からは多くの出土があり、それらの出土品から弥生時代後期（約１８００年前）の遺跡であることがわかります。

山之神遺跡発見の経緯

山之神遺跡から出土した土器・石剣
とこなめ陶の森資料館 蔵

山之神遺跡は、山ノ神地区(現泉町２丁目)にあった瀧田繊維が工場拡張のための整地作業をしていた際に発見されたものです。畳ほどの大きさの楠の根とともに出土品が多数発見されたといわれます。このことは、地区に在住の古老も目撃したと聞いています。

ここから壺や甕、坏類などがまとまって掘り出されています。これらの器は、煮炊きや盛り付けするときに使ったり、食料などを保管したりしたものです。

現在、これらの出土品は、昭和４３年、常滑市の有形文化財(考古資料)に指定され、とこなめ陶の森資料館に保管されています。いずれも保存状態は良好で、常滑における弥生時代の豊かな暮らしを、私たちに伝えてくれます。

集落立地にすぐれた環境

遺跡があった山ノ神グランド
手前の丘陵部の地形は、谷頭(こくとう)と呼ばれ、
生活する上で貴重な水源となっている

昭和５０年代後半になって、この繊維工場は取り壊され、平地のグランドとなっています。

北側の丘陵地は上部が急斜面となり、いわゆる谷頭(こくとう)といわれる浸食谷となっています。

低部の現山ノ神グランドあたりには、谷頭起源の良質な水が豊富に湧き出ています。

また、樽水川が近くを流れ海にも近いことなど、海洋資源獲得の絶好の集落立地となっています。このことから、この周辺には、常滑市域のなかでも、弥生時代の拠点的な集落があった可能性が高いと類推されています。

貴重な出土品「磨製石剣」

完全な形で出土した磨製石剣

粘板岩を丁寧に磨いて作られた磨製石剣も出土しています。山之神周辺の水田(現山ノ神グランド南側)で、陶土を採掘していた際に発見されたといわれます。これは鉄剣を模した両刃のもので、完全な形で出土しています。断面は菱形をしていて、表面には磨いたときについたと思われる筋が縦に何本もあります。材質の強度は弱く、武具ではなく、祭祀や儀式などで使われた儀器と考えられています。

磨製石剣は、東海地方ではきわめて数が少なく、完全な形で出土しているのは山之神遺跡だけです。愛知県屈指の優品であり、大変貴重な石器です。常滑市指定の文化財（考古資料）となっています。

現在、御嶽神社から山ノ神グランドまでの丘陵地には、まだまだ土器や石器が発見されずに埋まっているかも知れません。

（3） 洞雲寺の歴史について

阿弥陀如来坐像(本尊)

開　基　弘治元年(1555)4月8日
開　山　善海法師〈元亀3年(1572)8月8日遷化〉
住　職　光空順基〈磯部 順基 第26世〉
札　所　◆ 知多四国霊場 第62番
　　◆ 知多西国三十三所霊場 第13番
　　◆ 法然上人知多二十五霊場 第12番

御嶽山 洞雲寺 本堂

〔御嶽山(山号)の由来〕

御嶽山 洞雲寺（みたけざん とううんじ）は、弘治元年（１５５５年）に善海法師により開山されました。

天平年間、聖武天皇の勅願を受けた行基菩薩は、天竺の香木で刻んだ聖観世音菩薩を御嶽山に安置し、樽水の奥に七堂伽藍三百坊を有した知多半島随一の巨刹「御嶽三百坊」を建立しました。しかし、天文六年（１５３７年）の兵火により、ことごとく焼き払われました。諸堂の焼失より難を逃れるため、仏像は池に沈められ、田畑に埋められたりしたと伝えられています。

西阿野の高讃寺の仁王像、武豊上ゲの大日寺の大日如来も関わりがあり、山号は同じく「御嶽山」と称しています。

時代は流れ、御嶽池の改浚の折、本尊となっている**「阿弥陀如来坐像」が**池の中より出現しました。坐像の高は八十八センチ、榧材一木造です。彫眼で体部、膝部の二材から構成され、素木で現状は生漆塗りとされています。西方極楽浄土から来迎する姿ではなく、悩みを紐解く瞑想の姿で表現されております。和顔には、優しさが漂い、衣は十世紀風の古様を示しています。おそらく十一世紀前半頃(平安末期)と推測されています。昭和４４年４月１日、第１２号で常滑市指定の文化財となりました。寺伝には、行基菩薩の作とされています。

この尊い法縁を機に、念仏信仰の場として寺院が建立されました。これが『西山浄土宗御嶽山洞雲寺』の始まりです。

その後、念仏の道場としてその法灯が継承されています。

境内は、春は桜、夏は蓮花、秋は紅葉と季節に合わせて趣を変えていきます。平成２２年６月には、小澤康麿さん作の「寧護大師」が奉納されました。

７月になると、１本の茎から二つの花をつける非常に珍しい「双頭蓮」が咲き、訪れる人たちの目を楽しませています。

めずらしい「双頭蓮」の花

〔聖観世音菩薩立像〕

聖観世音菩薩の立像は、境内南の小高い丘に建つ「観音堂」に安置されています。像の高さは六十二センチで、檜材一木造です。全身は後の世に修復された色彩が厚く覆っていますが、藤原後期の優美な造形が感じられます。左手に蓮華を執られ、天衣を懸け、腰を左に寄せ右足をゆるめて立つ姿で、世の音を観る慈悲深い観音菩薩です。寺伝では、恵心都源信の作と伝えられます。

古文書によれば、江戸時代には１７年ごとに御開帳が行われておりましたが、現在は３３年に一度のご縁となる秘仏です。また、御嶽山観音院洞雲寺と称される記述もあります。

丘の上に建つ「観音堂」

観世音菩薩立像

〔毘沙門天立像〕

昭和３１年（１９５６年）に、津島神社境内に祀られていた毘沙門天が、御嶽山洞雲寺に遷座されました。その後、毎年４月３日と１０月３日には、毘沙門天大祭が行われていました。

毘沙門天立像

毘沙門天は、眼光鋭く実に凛々しいお姿をしています。左手に宝塔、右手には宝棒をもち、厄病等を寄せ付けないとされ、七福神の一神として崇められています。

毘沙門天大祭　（昭和40年頃）

〔慰 霊 碑〕

慰霊碑は観音堂の向かいに建てられています。碑の上部には、『平和之礎（へいわのいしずえ）』の文字が大きく刻まれ、九十七名の名前が記されています。

碑の裏側には、『満州事変・支那事変・大東亜戦 戦没者及戦災死者合祀碑 昭和三十年三月建之 石庄刻 釣月書』と記されています。
碑の前には、花が手向けられていました。

戦没者・戦災死者 慰霊碑

〔涅 槃 図〕

寛政年間(18世紀末) 制作

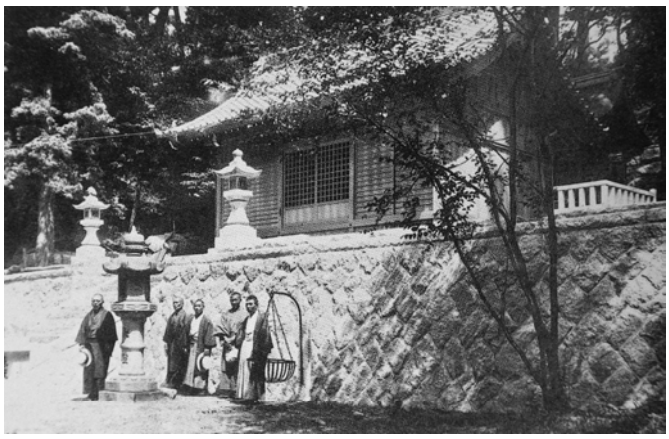
涅槃図は、釈迦入滅の情景を描いた絵のことです。釈迦は二月十五日になくなったとされ、この日には、毎年「涅槃会」と呼ばれる法要が営まれ、その本尊として、この涅槃図が本堂に懸けられます。釈迦の入滅(死)に際し、嘆き悲しむ仏弟子たちや母である摩耶夫人の一行が飛来している情景がが描かれています。

極彩色のこの絵図は、保存の状況もきわめて良好で、大変貴重なものです。

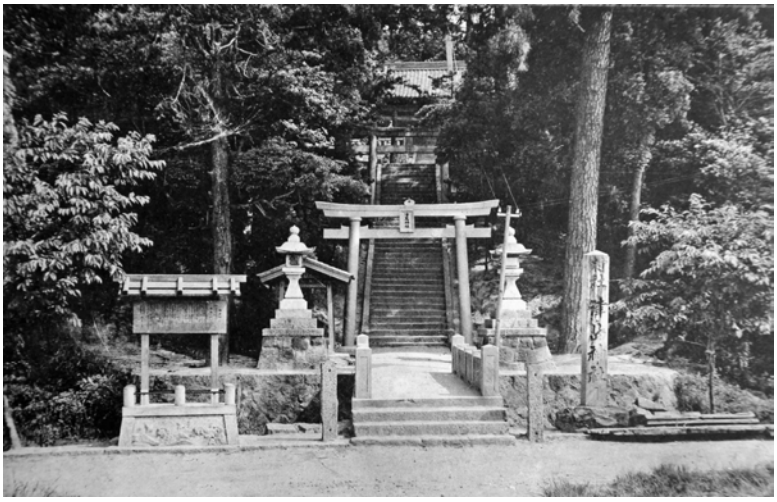
（4） 津島神社の歴史について

神 社 名	津島神社
社　　格	十級社（旧指定村社）
鎮 座 地	常滑市樽水町４丁目７７番地
御 祭 神	素盞嗚尊(スサノオノミコト)　奇稲田姫命(クシナダヒメ)
末　　社	金刀比羅社　御鍬社　熱田社　稲荷社　知立社　龍神社 山神社　御葭社　秋葉社(半僧坊大権現)　多賀社　居森社 猿田彦社　武神社　塞神社
無 格 社	天神社
由　　緒	創建は明らかでない。記録によれば、元和２年(1616年)再建とあり。尾張誌には『牛頭天王ノ社 樽水村内にあり』とある。明治５年に列格し、同４０年指定社となる。

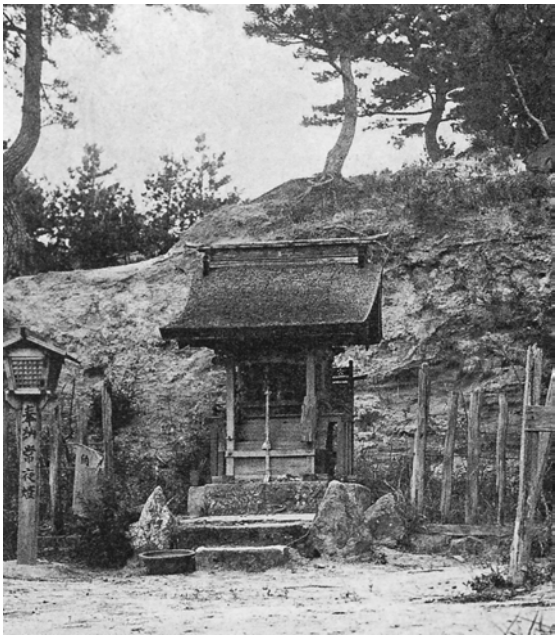
明治時代の津島神社



大正時代の津島神社



昭和20年頃の津島神社



昭和20年頃の天神社

大正御大典記念　昭和御大典記念
平成御大典記念

平成16年　再建された津島神社の社標の前で、関係者の記念撮影

昭和60年　総パ事業着工。初めに樽水川の河川改修工事を実施する。津島神社の橋(津島神橋)も新しくなり、翌61年4月の例年祭に市長(庭瀬氏)も出席し、津島神橋のお披露目となる。

「平成御大典記念」記念撮影　（平成2年11月23日　新嘗祭）

〔現在の津島神社〕

大鳥居から拝殿への石段

大鳥居の額

拝殿階段下の狛犬

元旦祭の準備が整った拝殿前

拝　　殿

本　　殿

由 緒 版

寄 付 者 一 覧

上記の他に昔からの建造品(狛犬 灯籠 鳥居等)や社標 提灯 幕など、篤志者による寄付多数あり。

平成16年 再建された『社標』

本殿の両脇に並ぶ『末社』

神社の橋『津島神橋』

天神社(菅原道眞公)

〔囃子保存会の活動〕

囃子保存会は、樽水に伝わる伝統神楽を引き継ぎ、公民館で定期的に練習をしている。祭礼は勿論、元旦祭、農神祭、新嘗祭、本宮神社等にも参加する。

各戸へお神楽の巡回

例年祭でお囃子演奏を披露

市制60周年山車曳き揃えに参加

地区盆踊り大会でお囃子演奏

〔厄歳の方たちの活動〕

元旦祭での振る舞い、例年祭餅投げ、盆踊り大会への協賛など、活動は多彩。

例年祭での餅投げ

例年祭 お楽しみ大抽選会

〔樽水区例年祭実行委員会の活動〕

実行委員会を構成する区議が中心となり、例年祭の行事を企画、運営する。バザーや舞台の設営、出演団体の依頼、抽選会の準備、まつりポスターの募集など多面にわたる。直会の準備は区関係者等女性の協力を得て行われる。

公民館前庭でバザー

まつりポスターの展示

舞台の設営

アトラクション：和太鼓演奏

神事終了後の「直会」

(5)　本宮神社(本宮祠)の歴史について

神 社 名　　本宮祠
社　　格　　十四級（旧無格社）
鎮 座 地　　常滑市樽水字蓮ヶ池１番の１
御 祭 神　　大巳貴命(オオナムチノミコト＝大国主命)
末　　社　　奥山半僧坊大権現
由　　緒　　社伝によれば、文政十年(1827年)樽水村住人澤田勘四郎氏三河国砥鹿神社より勧請した。明治六年、据置公許となる。

大正時代の本宮祠

昭和中頃の本宮祠

〔本宮山航空灯台〕

本宮山航空灯台は、昭和8年、夜間飛行をする航空機(郵便物運搬が目的)に、航路を示すためにに建てられた。高さは50尺(16.5m)。戦況の悪化とともに昭和16年に廃止された。

遠足の写真:背後に航空灯台が見える

光源1KWの大型航空灯台

〔現在の本宮神社〕

正月には、元旦祭が執り行われ、多くの崇敬者が訪れる。元日と二日には、　甘酒などが振る舞われる。毎月１日、１１日に、町内氏子有志により、茶菓の接待がある。

本宮祠拝殿

元旦祭の振る舞い

願いを書き込んだ『千本幟』

拝殿前の狛犬

澤田勘四郎の石碑

山の神グランド入口にある本宮山の社標

〔本宮山里山整備事業〕

本宮山一帯を整備するため樽水区関係者により『樽水本宮山プロジェクト』が結成され、平成27年、里山整備事業が完結した。遊歩道や休憩所、展望台などがあり、本宮山周辺は、憩いの里山として甦った。

休憩所（作業小屋）

整備された遊歩道

展望台からの眺望

三角点：国土地理院設置

護国観音碑

樽水本宮神社御遷宮の様子

〔遷座祭記念写真集より〕

昭和56年12月6日

本宮神社趣意書

氏子崇敬者への御寄付のお願い
10壱千円以上でお願い
総工費 500万円

御神体 移動の儀式

本宮神社へ向けて移動

御神体 津島神社から移動開始

本宮神社本殿へ安置

津島神橋を渡る

遷宮が無事終了

〔遷座記念式典〕

昭和56年12月7日　挙行

遷座された本宮祠本殿

樽水区長　谷川洋明氏　挨拶

式典の締めは乾杯で

砥鹿神社宮司を岩田神官が案内

全役員の集合写真

氏子総代記念写真

〔本宮山 護国観音像〕

この陶製観音像は、日本と中国の戦死者を慰霊するため、昭和14年柴山清風氏により、作られたものである。激戦地中国南京の土と日本の土を混ぜ合わせたものが使われたという。

完成した観音像を山上に設置するため、紅白の紐で飾られた牛に引かれ、後ろからは稚児が続くという式典が行われた。

残念ながらこの観音像は、終戦間際、不心得な何者かにより破壊されてしまった。

しかし、つい最近になって、観音像の頭部が、洞雲寺の中庭に置かれていることが判明した。傷もなく、微笑みをたたえたお顔立ちは、心洗われる思いがする。

現存当時の護国観音像

護国観音像の頭部（洞雲寺中庭に安置）

(6) 災害調べについて

・記録に残っている自然災害について、常滑市誌から見る。(昭和50年まで)

西　暦	和　暦	種　　別	概　　要
１５７０	永禄 13 8.21	風水害	村内人家、其他建物大部分倒壊
１６６６	寛文　6 4.28	風水害	知多半島に津波襲来、鬼崎の新田、大野の製塩業に被害
１７０３	元禄 16 11.23	大地震 大津波	人家倒壊・流失あり、大野の内宮社境内破損
１７０７	宝永　4 10.　8	大地震	枳豆志荘に住家、其他建物大部分倒壊
１７２２	享保　7 8.14	大　雨 大津波	人家の流失、河川堤防決壊、海岸石猿尾決壊個所多数
１８５４	安政 元 11.　4	大地震 大津波	人家倒壊多数、幾日間鳴動止まず人心に不安を感じ神仏祈願
１８７０	明治　3 9.18	風水害	大高波にて海岸線の被害甚大、米作皆無程度の災害
１８８０	明治 13 9.13	風水害	知多半島で堤防決壊多数、家屋・田畑被害多く、大野で堤防320m 決壊
１８８８	明治 21 7.22	風水害	大野海岸で堤防 75m 破損
１８９１	明治 24 10.28	大地震 (濃尾大地震)	県下で死者 2,495、家屋全壊 34,494 知多半島は他地方に比し軽く 死者 2、全壊 44 (M＝8.4)
１９０７	明治 40 8.15	風水害	県下で死者 19、西浦地区で堤防破損 3、床上浸水 100、舟 4 破壊
１９１２	大正 元 9.22	風水害	県下で死者 141、知多半島で死者 6、全壊家屋 167
１９２３	大正 12 9.　1	大地震 (関東大震災)	全体で死者 99,331、全壊焼失家屋 625,394 県下で11時58分 強い地震、柱時計止まる (M＝7.9)
１９３４	昭和　9 9.21	風水害 (室戸台風)	県下で死者 2、名古屋で最大風速 32.9m、全壊家屋 723
１９４４	昭和 19 12.　7	大地震 (東南海地震)	全体で死者 871、全壊家屋 13,586 常滑市で全壊 126、半壊 849と被害甚大 (M＝8.0)
１９４５	昭和 20 1.13	大地震 (三河地震)	県下の死者 2,252、全壊家屋 5,233 常滑市としては死傷者無く家屋被害僅少 (M＝7.1)
１９４６	昭和 21 12.21	大地震 (南海地震)	県下の死者 10、常滑市の被害僅少
１９５３	昭和 28 9.25	風水害 (台風13号)	県下の死者 72、全壊家屋 1,193、高潮による堤防決壊など被害甚大、伊良湖で 957.1mb、最大瞬間風速 39.9m 記録
１９５９	昭和 34 9.26	風水害 (伊勢湾台風)	県下の死者 3,168(全域で 4,624)、全壊 23,334(全域 32,348) 高潮の堤防決壊被害甚大、潮岬で929.5mb 伊良湖瞬間55.3m
１９６１	昭和 36 6.26	風水害 (集中豪雨)	連日の降雨が続き、当日10時頃より集中豪雨となり樽水奥地愛知用水堤防決壊し、樽水川氾濫　河川近くの倉庫・橋多く流出し、床上浸水多数
１９７４	昭和 49 7.25	風水害 (集中豪雨)	明け方の集中豪雨で、河川の堤防決壊等被害大

〔伊勢湾台風の惨禍〕

昭和34年9月26日に襲来した台風15号は、空前絶後の被害をもたらした。西浦北小学校も高潮により惨憺たる被害を被った。被害の状況は、写真の通りである。

学校を守っていた護岸堤防の波返しもすべて崩壊している。

御影石を積んだだけの護岸は、高潮で破壊され、見る影もない。

校地北端に隣接した水田は堤防決壊により、海水が流れ込んでいる。

運動場側の校舎も半分ほどが倒壊した

家庭科室の惨状
畳は流され、床は陥没している
ガラス窓の外は、運動場が見える。

洞雲寺の松： 立派な松の大木も、根こそぎ倒されている。

〔昭和36年6月 集中豪雨禍〕

伊勢湾台風の惨禍が癒えぬ昭和３６年６月２６日、連日降り続いた雨は、集中豪雨の様相を呈してきた。雨量に耐え切れず、愛知用水の土手が決壊した。 濁流は樽水川に沿って一気に流れ込み、川沿いの多くの住家は浸水などの被害に遭った。

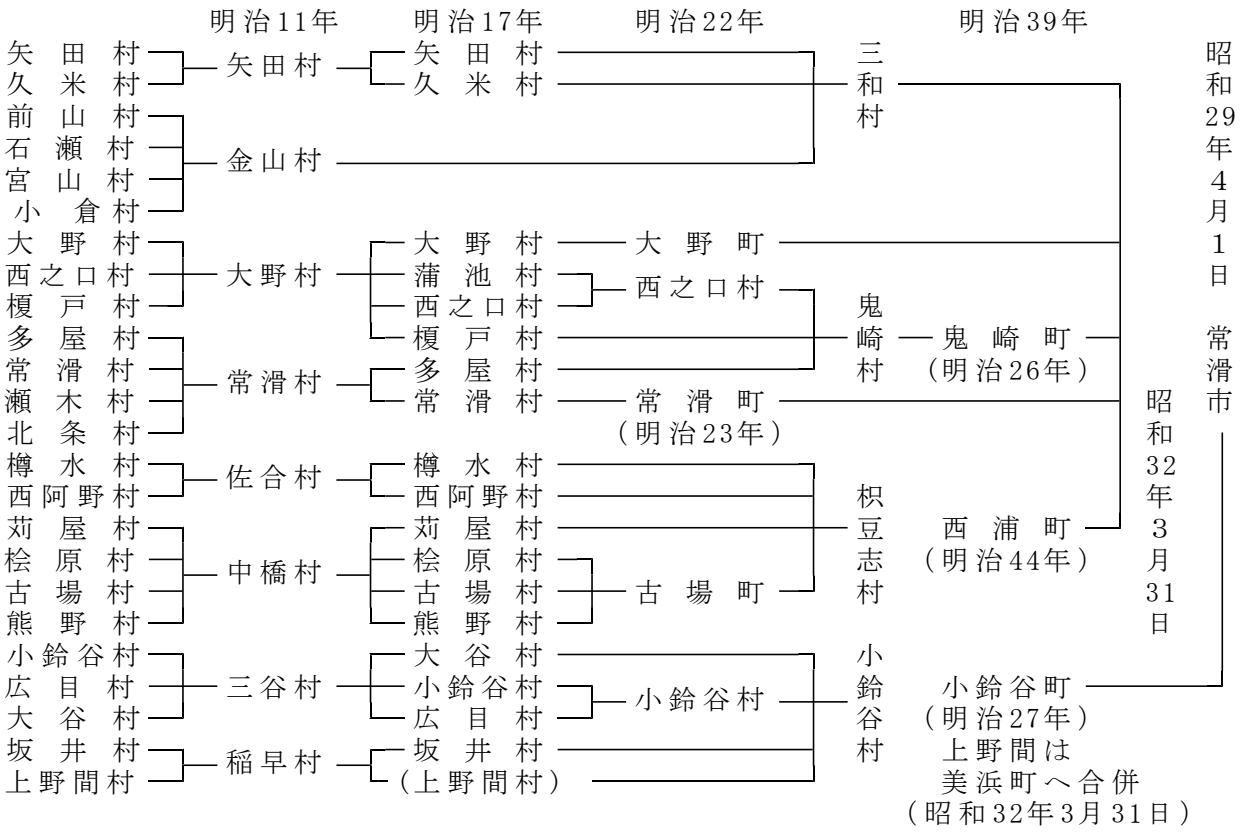
川の下流には、樽水橋付近が見える。
住家の窓からは、川を覗く人の姿が。

樽水橋付近： 決壊した愛知用水の濁流で道路が冠水している。

火の見櫓付近から、樽水川の東方面を見る。道路が完全に冠水している。

（7）常滑市の町村合併とは

◆ 常滑市の町村合併（平成17年度版　市政概要より）



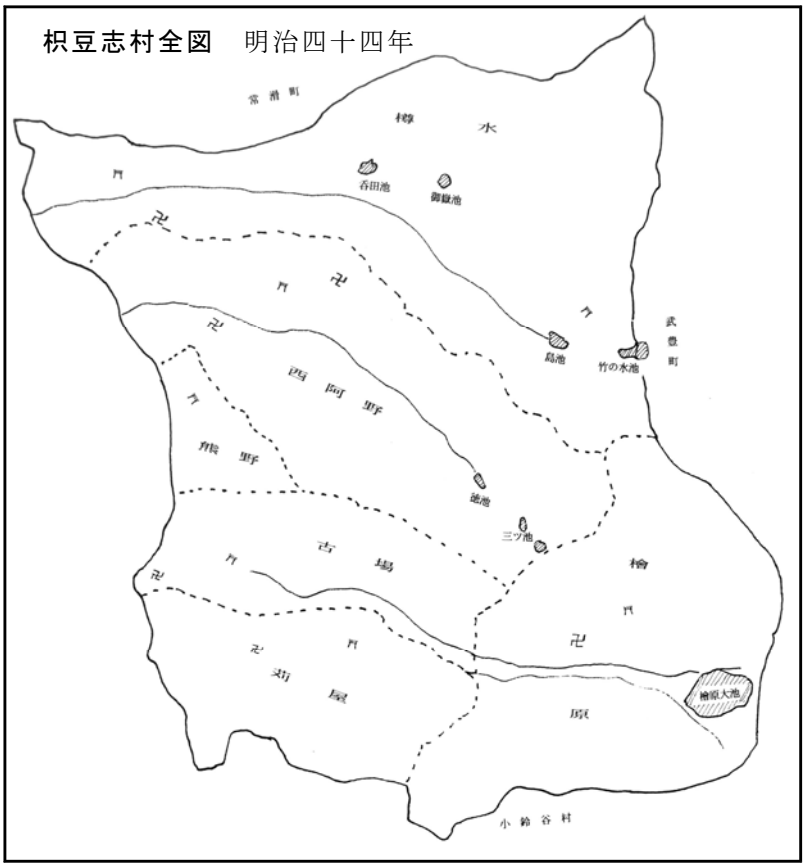
◆ 合併前の西浦町（枳豆志村）の概要（明治44年当時）

枳豆志村は、明治39年、樽水、西阿野、苅屋、古場（近世桧原、古場、熊野）の四か村が合併して成立た。

枳豆志の名称は、このあたりの中世の荘園の名をとったものである。

明治44年に、町制施行により西浦町となる。

当時の村の戸数は950戸であった。村民の職業は、漁業（180戸）、農業（150戸）、陶器工場日雇い（150戸）、魚類販売業（40戸）、雑貨商（40戸）、航海業（40戸）、酒造倉日雇い（30戸）などであった。



（8）農業協同組合の歴史について

〔組合の創立〕

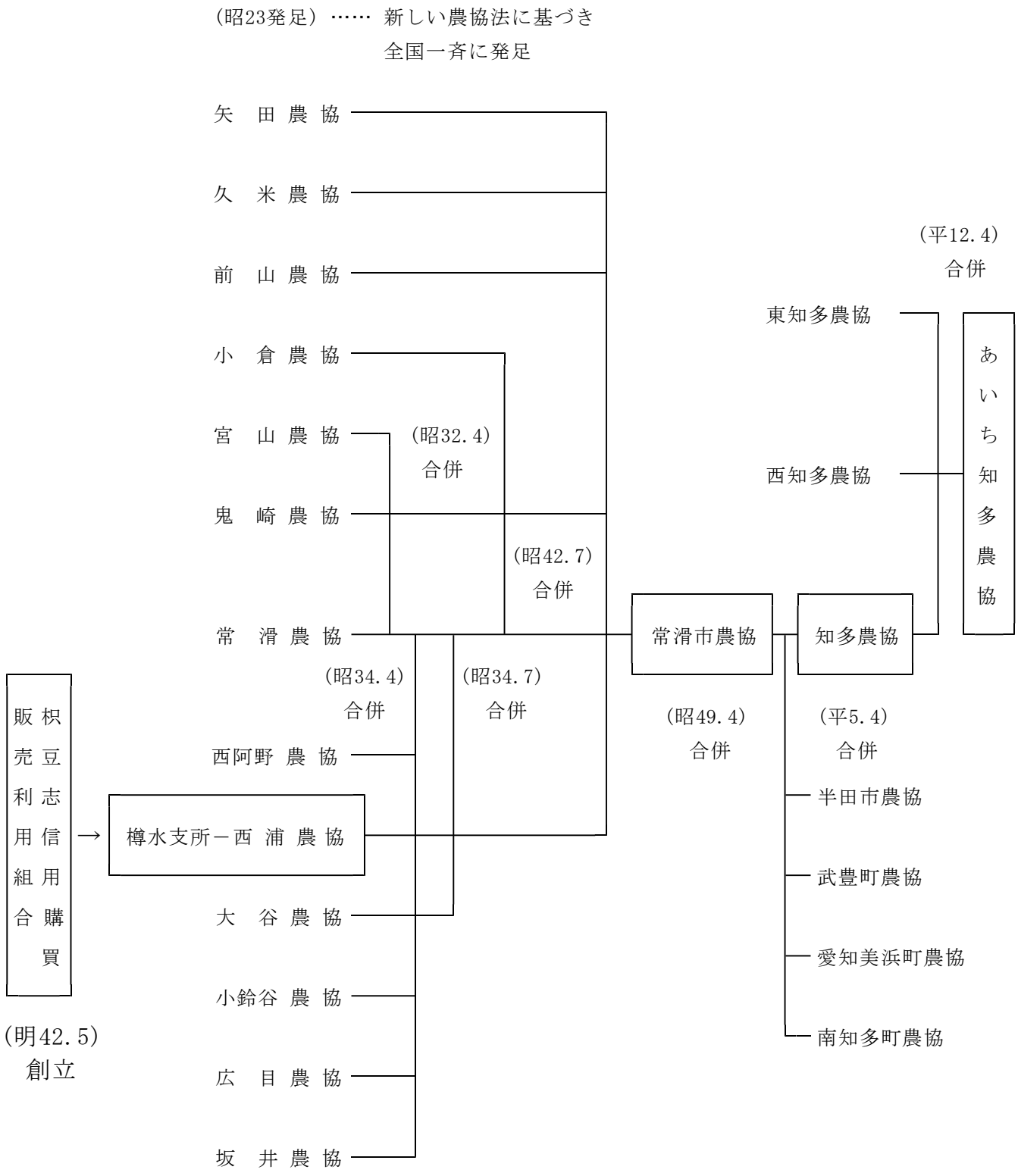
農業の振興と福祉事業増進のため、産業組合の設立に多大な尽力のあった樽水の住人「谷川由太郎氏」によって、明治４２年５月「枳豆志信用購買販売利用組合」が設立される。

谷川由太郎氏は、若い頃より農業及び多方面の人達との人脈が多く、特に三河の安城地区を“日本のデンマーク”へと構築した『山崎延吉翁』とも深い親交があった。山崎氏は『我農生』という雅号を用い『我は農に生まれ、我は農に生き、我は農に生かさん』という信条により、農民の社会教育に精通された。枳豆志組合創立記念に下記の書を贈呈される。この書は、今もＪＡさわやか支店の二階に掲示されている。

『協　力　而　達』　　為 枳豆志組合　我農生

『枳豆志組合 創立二十五周年 記念大法会』　　撮影 昭和八年一月二十八日

〔農協の成立と合併の経過〕



☆ 現在の農協の事業内容としては、信用・購買・販売・共済・加工・営農指導などの事業が挙げられるが、事業の中心は、信用事業に傾きがちである。

(9) 西浦町立北小学校の概要及び西浦中学校の沿革について

〔西浦北小学校の沿革・概要〕

和　暦	校　　名	備　　考
明治　6. 3	樽水義校と称す	学制頒布せられて創立　樽水字上松に設置
7	小学養鳳学校と改称	樽水字本郷に設置
9	小学樽水学校と改称	
20. 4. 1	尋常小学樽水学校と改称	
25. 4. 1	樽水村立樽水尋常小学校と改称	
26. 3.28		校舎新築の為　樽水村字塩田に移転
40. 1. 1	枳豆志第一尋常小学校と改称	
44.12. 1	西浦第一尋常高等小学校と改称	町制施行
大正　3. 4. 1	西浦第一尋常小学校と改称	高等科児童は、常滑高等小学校に委託
9. 1.17		校舎新築
11. 3.30		全校新校舎に移る
11. 4. 1	西浦第一尋常高等小学校と改称	
昭和 16. 4. 1	西浦町立第一国民学校と改称	
22. 4. 1	西浦町立第一小学校と改称	
23. 4. 1	西浦町立北小学校と改称	

常滑市立西浦北小学校

常滑尋常高等小学校校舎

〔西浦中学校の沿革・概要〕

本校は六三制の学制施行に当たって、昭和22年4月当時、大字西阿野所在の町立青年学校に、本校を第一国民学校及び第二国民学校に分教場を併設し開校する。これに先立って新制中学校を、大字熊野字北馬場地内に建設する旨、元河和航空隊建物を買収し、第一期工事に着手。以後、校地均等工事を遂行し、昭和24年4月24日新校舎落成する。

和　暦	校　　名
昭 22. 4.18	入学式挙行
4.26	課業開始(本校青年学校　分教場西一校　西二校)
5. 3	開校式(於西浦第一国民学校)挙行
23. 9.10	学校統合により西二小学校に移転
24. 1.20	西二小学校より新校舎へ移転
24. 4.24	校舎落成式、町民記念大運動会

常滑市立西浦中学校

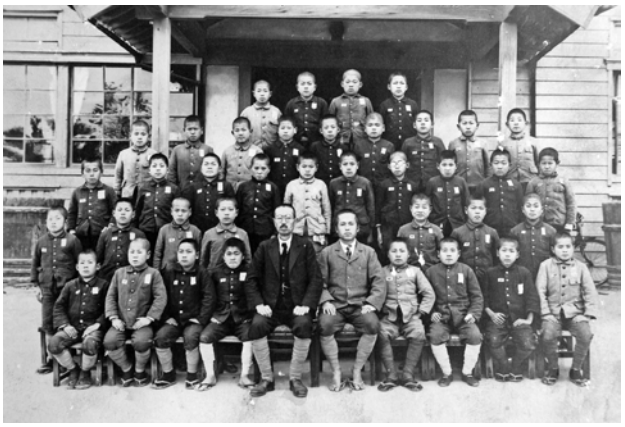
〔西浦北小学校 校舎全景〕

元気よくラジオ体操をする全校児童

〔小学校 卒業記念写真〕

西浦第一尋常小学校　大正9年卒業

常滑尋常高等小学校 大正11年卒業



昭和20年 卒業写真(戦時中)

昭和30年 卒業写真(常滑市になって初年度)

(10) 黒鍬かせぎについて

黒鍬かせぎとは、江戸時代「黒鍬師」と呼ばれる人達が毎年農作業が暇になる時期を利用して他地域の土木工事(ため池づくり・護岸工事・開墾など)に出向いた出稼ぎのことです。
土木工事に利用した鍬の柄が黒色をしているから黒鍬稼ぎと呼ばれるようになったといわれます。

◆ 江戸時代の各村々の様子(寛文村々覚書・尾張徇行記より)

旧村名	寛文11(1671年)		文政５(１８２２年) 当時の様子		
	戸	人	戸	人	
矢　田	65	515	(259)		(明治初期の戸数)　黒鍬多数
久　米	132	833	(253)		(明治初期の戸数)　黒鍬多数, 漁師
前　山	100	583	(232)		(明治初期の戸数)　黒鍬多数, 酒造
石　瀬	25	126			鍛冶
宮　山	45	211	(95)		(明治初期の戸数)
小　倉	120	774			塩浜3町余, 鍛冶23人, 酒造
大　野	755	3402			酒造17, 鍛冶66, 商人の町, 潮湯治場
西之口	190	840	(307)		(明治初期の戸数)　塩浜, 商家44, 工業29
榎　戸	39	179			小船7, 黒鍬稼ぎ
多　屋	191	832	187	711	波不知船9(薪, 熊野～名古屋), 漁船24, 酒屋1, 鍛冶屋1, 黒鍬20人
北　条	70	364	207	936	かめ細工人90, 波不知船50, 酒屋(江戸・伊勢), 牛馬33, 松葉を売る
瀬　木	75	332	34	512	かめ細工人5, 波不知船11(松葉・薪・かめ), 牛馬13
常　滑	317	1401	533	2120	商屋多し, 回船13(米), 波不知船23, 漁船39, 酒屋12(江戸), 味噌屋1 油屋3(江戸・名古屋)
樽　水	57	280	164	731	瓦師1, 船大工, 黒鍬40人, 牛馬22
西阿野	85	433	163	782	高採船1, 黒鍬50人, 酒屋3, 牛馬11
熊　野	14	56	45	209	波不知船1(薪・伊勢), 黒鍬9人, 牛馬2
古　場	35	196	88	379	酒屋(勢州), 波不知船1, 黒鍬30人, 馬5
桧　原	21	123	56	256	農業(中稲・晩稲が多い), 牛17
苅　屋	59	303	120	516	波不知船1, 運送船4, 漁師20人, 黒鍬40人, 馬11
大　谷	85	426	192	850	冶工3(三河へ), 黒鍬80人(河内へ), 酒戸あり(江戸へ), 牛馬15
小鈴谷	41	202	82	407	酒屋3, 波不知船1, 漁師3, 黒鍬20人, 牛馬7
広　目	16	146	38	153	黒鍬25人
坂　井	57	495	120	552	酒屋3, 波不知船3, 黒鍬36人, むしろ売り(成岩村へ), 牛馬7

◆ 大正から昭和の初期　残された資料からみる樽水の黒鍬関連仕事の実際

〔粘土採掘作業〕

水田の圃場で下方(約１ｍ以下)にある良質な粘土を窯業用の原料として採掘し、納品する作業。稲作が終わった冬期に地主から水田を借り受けて、農業者仲間で出資して、トロッコやレール、スコップなどを購入して採土。採土した圃場は他所から客土して元の水田に戻す。仲間は出役に応じて賃金を得る。この仕事は昭和30年代まで続いていたようだ。

大正14、15年当時の樽水土呂仲間の人達

谷川　安吉	谷川　栄松	中野吉太朗	中野　友吉	伊藤保太郎	中野稲次郎
土居由太郎	谷川　岩吉	中野　　弘	高澤　繁一	谷川　金助	中野半太郎
谷川宇八万	谷川久三郎	間宮　善蔵	谷川　岩万	中野嶋太郎	谷川　亜八
谷川　幸吉	間宮　健蔵	間野　由一			

〔塩田地区の堤防・水門工事〕

昭和2、3年頃 工事に従事した人達

谷川萬之助	土居　広二	谷川俊太郎	西田幸太郎
土居喜之助	新居万三郎	沢田常太郎	森下　久松

(11)　西浦保育所から西浦北保育園へ

〔西浦保育所の開所〕

従来、幼児の子守について、農繁期に際し寺院等を利用して季節託児所を開設していたが、樽水及び西阿野部落は、農漁業や陶磁器製造など勤労者が多く、常設託児所の設置を要望せられていた際、樽水区所有の元小学校跡の土地建物を無償使用し得ることとなり、保育事業に経験を有す沢田かよ女史を迎え、開所に至った。

年　月　日	昭和２１年４月２日　開所
名　　称	西浦保育所
所　在　地	西浦町大字樽水字塩田54番地（現介護施設『あかり』の地）
代表者所長	沢田かよ（私立経営）
職　　員	有給３名　無給１名
保　育　料	１人１ケ月　当初は５円からスタートする

・昭和２２年４月より西浦保育園と改称する。園児１１０名～１２０名
　保育料も始めは１ケ月５円であったが、昭和２４年度は１５０円となる。
　当時は個人経営で経過してきたが昭和２５年３月３１日限り町営に移管する。

〔公立西浦町立北保育園所の開園〕

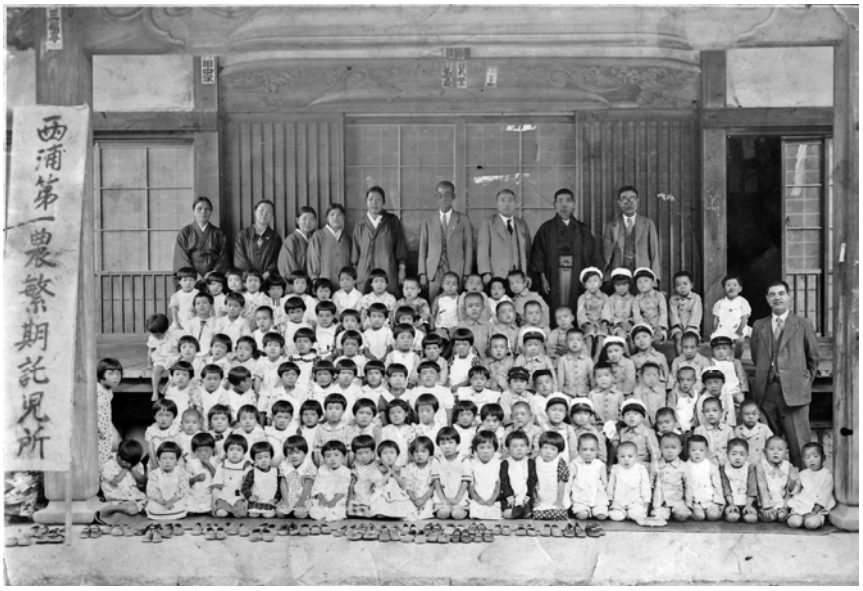
昭和２５年１月、私立経営として多年貢献した沢田かよ氏より経営を町移管の申し出があり町議会において公設に決定、借用園舎の大修理をし昭和２５年４月１日 公立開園する。

〈保育園の経緯〉

年 月	摘　　要
昭25.4	園長 民生委員長　事務取扱西北校長　保母５名　園児140名 収容
26.4	園長　西浦町長　事務取扱西北校長　保母５名　園児163名 収容
27.4	園長　西浦町長　事務取扱西北校長　保母７名　園児225名 収容
28.4	園長　西浦町長　事務取扱西北校長　保母７名　園児232名 収容
29.4.1	市制施行　常滑市立西浦北保育園と改称　園長・参与　久田慶三
	事務取扱西北校長　宮地 勇
	保母長　沢田かよ　保母６名　園児250名 収容

常滑市制施行以降、昭和４８年に津島神社東側に市道常西線開通に伴い、保育園が樽水区所有津島神社境内地に建設される。この際西阿野地区にも西浦中保育園が建設され、部落単位で独立する。

平成の時代になり、園児が減少の一途をたどり、また常滑市の財政状況の悪化もあり、平成２３年に保育園も民営化され、現在の『波の音こども園』の開園となった。



西浦第一農繁期託児所

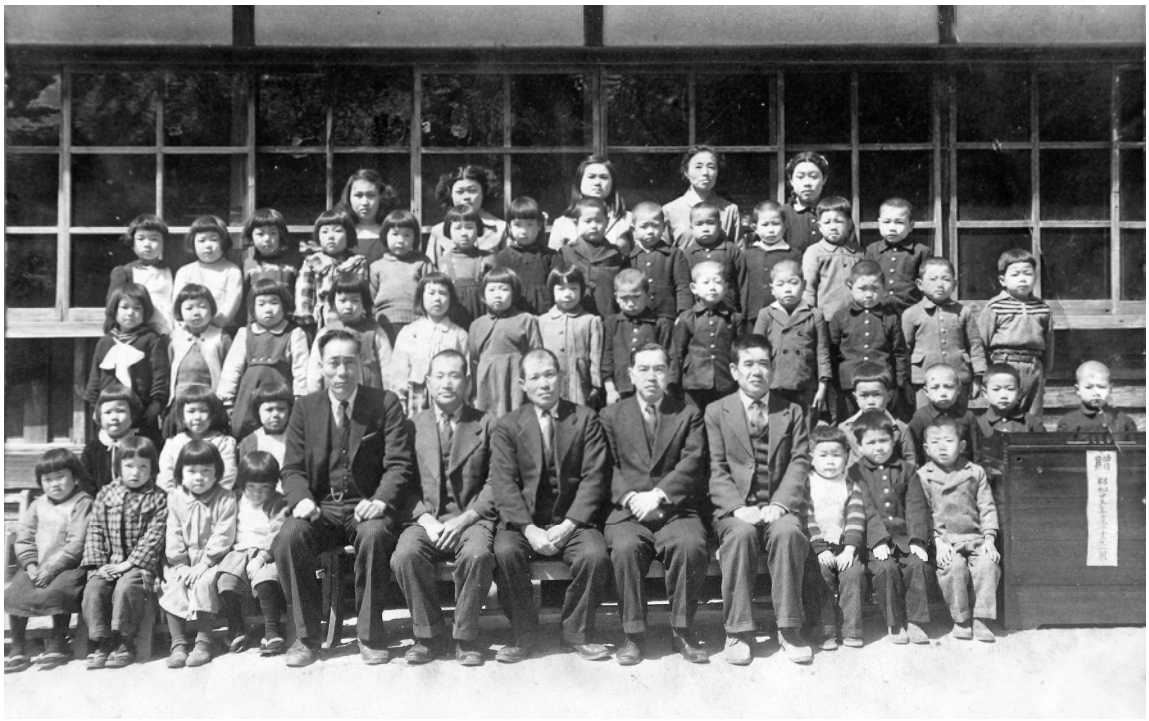
洞雲寺において、農家の繁忙期に、季節託児所が開設されていた。

本堂の前に全員集合し、記念写真を撮影。

昭和24年　西浦保育所

保育所は、現介護施設『あかり』の地にあった。元小学校の土地建物を無償使用して、開設された。

写真最後列の右から二番目が沢田かよ所長。



昭和25年4月　公立開園(西浦町立北保育)

(12) 総パ事業 換地処分を終え 営農事業本格化

〔総パ事業概要〕

① 目　　的

樽水地区は、知多半島の中央部西海岸に位置し、水稲を主体として果樹、そ菜、園芸が営まれている。しかし、土地基盤の状況は、起伏に富んだ地形で狭小な区画の上、道排水路が未整備なため、営農の近代化が阻まれてきた。

このため、地区の全体構想ならびに土地利用計画に基づき、地域の農業基盤、生活環境等の実状を踏まえた経営改善を図るため、基幹流通道路、圃場整備、かんがい排水等の整備を施し、水田、畑、果樹園の集団化を図るとともに、密接な関係にある集落内の排水改良、農業者の分家住宅用地等を、一体的に整備したものである。

② 規　　模

〈事業面積(換地面積)〉　　１３７.５ｈａ

〈 内　訳〉

田	50.6 ha	ため池 池沼	7.85ha
畑	44.5	道水路	23.7
施設用地	3.6	山林 原野	3.0
宅地	1.25	その他	3.0

〈利権者総数〉　　２６２人

③ 事 業 経 過

昭和４８年度	事 業 採 択
昭和５４年度	樽水川幹線排水路改修工事
↓	
昭和６２年度	中坪工区工事着工
昭和６３年度	石亀工区、二ツ峰工区
平成　元年度	長曽１、２、３、５工区
平成　２年度	長曽４工区、呑田工区、島池改修、呑田池改修
平成　３年度	竹の水池改修
平成　４年度	幹線農道、支線農道舗装工
平成６年　９月３０日	一時利用指定
平成８年　１月　８日	権利者会議
平成８年　３月１４日	換地計画確定
平成８年　３月２９日	換地処分公告
平成８年１０月　４日	換地処分登記完了

※ 換地処分以後、総パ事業工区内の保全管理について、現在は『樽水環境保全会』によって、保全活動が実践されている。

〈樽水環境保全会〉	樽水管理工区と樽水生産組合そして樽水区の役員で平成１５年頃より組織された。

〔本宮山から眼下に点在する営農施設〕

生産の拠点　JA農機具格納施設

施設団地のビニールハウス施設

整備圃場での稲作コンバイン作業

施設園芸（苺の促成栽培）

ウズラの採卵農場

施設園芸（イチジクの促成栽培）12月

（13）セントレア開港にむけて

◆ 写真集 『セントレア　常滑から世界の空へ』より　　－谷川和親氏－

〈中部国際空港建設の歩み〉

年　月	摘　　要
1985年	本格的な調査などが始まる
1988　5月	中部国際空港株式会社を設立
7月	空港会社を中部空港の設置・運営管理者として指定（国土交通大臣）
1999　5月	旅客ターミナル地区基本設計(検討案)の概要を発表(空港会社)
6月	中部国際空港連絡鉄道株式会社を設立
7月	空港のアイデア募集開始
8月	公有水面埋立免許を出願
	空港会社が国土交通省に飛行場設置許可を申請(空港会社)
12月	飛行場設置に関わる公聴会を開催(国土交通省)
2000　4月	飛行場設置許可(国土交通大臣)
6月	ユニバーサルデザイン研究室を設置
	公有水面埋立免許を認可(愛知県)
8月	中部国際空港現地着工(空港会社)
9月	地域開発用地現地着工(愛知県企業庁)
10月	旅客ターミナルビル基本設計の概要を公表
	空港の愛称募集開始(空港会社)
11月	空港連絡道路 現地着工(愛知県企業庁)
12月	ＩＳ０１４００１認証取得(空港会社)
2001　2月	空港連絡鉄道建設現地着工(中部国際空港連絡鉄道)
3月	中部国際空港空港島護岸慨成(空港会社)
	埋立工事開始(空港会社)
5月	中部国際空港の愛称を『セントレア』と公表(空港会社)
8月	『セントレア』のロゴタイプ決定(空港会社)
11月	旅客ターミナルビル工事の安全祈願祭(施工ＪＶなど)
2002　1月	旅客ターミナルビル基礎杭打ち開始(空港会社)
3月	空港島の地名が『セントレア』に決定(常滑市)
8月	連絡道路橋が工事に使用できるようになる
10月	空港島の工事現場見学開始(空港会社)
	商業施設の概要を発表(空港会社)
	エアポートホテル事業者の決定について発表(空港会社)
12月	商業テナント第１次募集(空港会社)
2003　2月	商業テナント第２次募集(空港会社)
	空港用地造成慨成(空港会社)
7月	貨物ターミナル安全祈願祭(施工ＪＶなど)
8月	セントレアホテル起工式(名古屋鉄道)
9月	工事現場見学５万人に(空港会社)
	セントレアのオリジナルキャラクター発表(空港会社)
10月	管制塔竣工式(国土交通省)
	旅行ターミナルビル上棟式(空港会社)
11月	セントレア館情報コーナー来場２０万人(空港会社)
2004　2月	セントレアオリジナルキャラクターの名称が『なぞの旅人フー』に決定(空港会社)
3月	検査飛行開始(国土交通省)
	滑走路、誘導路の舗装工事完成(空港会社)
6月	初の検査機着陸
10月	旅行ターミナルビル竣工式(空港会社)
2005　2月	中部国際空港セントレア開港

完成した「中部国際空港」　対岸は前島埋立地　　（中日新聞提供）

旅客ターミナルビルの建設工事の様子　　2002.3　樽水漁港より

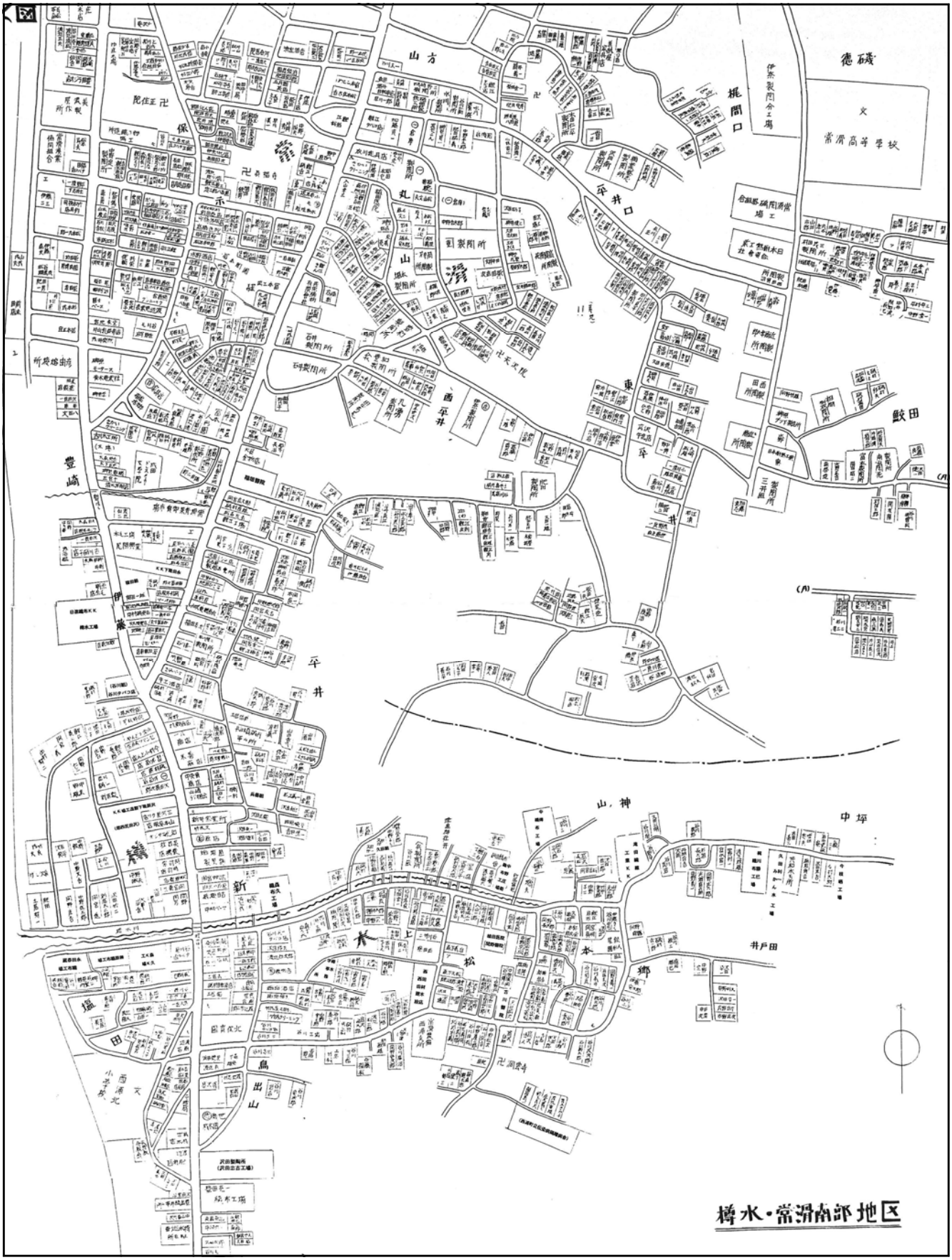
みたけ公園展望台からの遠望　2001.4

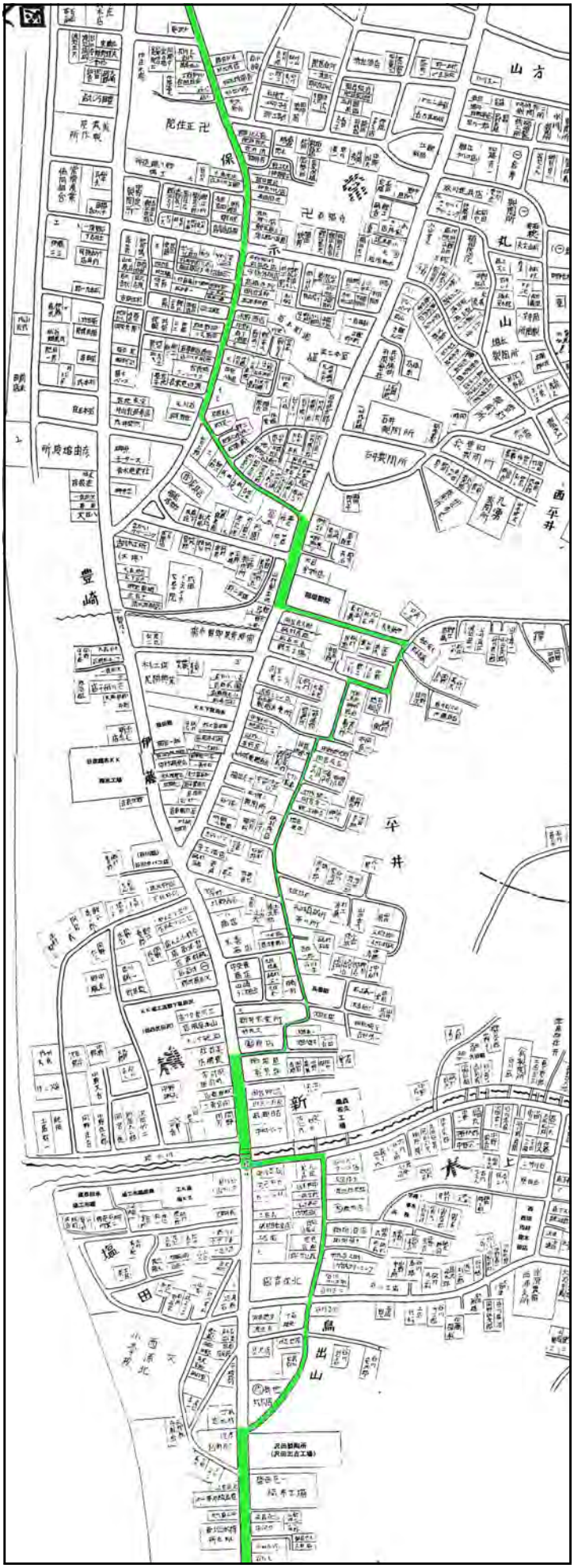
浚渫工事に活躍する巨大重機　2000.11

管制塔など空港諸施設の建設が進む　2003.11　樽水旧西北小護岸堤より

2　昭和37年の常滑市居住者明細図帖から読み取る

◆ 樽水・常滑南部地区全図





（14）　西浦街道について

西浦や　東浦あり　日間賀島
篠島かけて　四国なるらむ

この詩（俳句）は、知多四国開創由緒と伝わっている。知多半島は陸続きで細長いが、四国の地形に類似、白砂青松、気候温暖、古代万葉のころから訪れる人が多かった。この地には３５０以上の寺院があり、昔から信仰心の篤いところであった。

弘法大師は、弘仁５年（８１４年）御歳４１の時、三河から舟路で知多半島の東岸を南下され、南知多町大井の聖崎へ御上陸、同地の医王寺と山を越えた山海の岩屋寺で護摩行を修せられ、野間へ出て陸路西岸を北上されたと伝えられている。

聖崎に立つ弘法大師の石像

常に弘法大師に深く帰依していた知多市古見妙楽寺の住僧亮山阿闍梨（アジャリ）は、ある夜夢のお告げで『我は知多の地と深き血縁あり、汝知多の地に八十八箇所の霊場を開創し、以て衆生に結縁の門を開け。道侶二人を使わすべし』、亮山驚き眼覚むるや、枕元に本四国八十八箇所の霊場の砂が置かれてあった。時に文化六年（１８０９年）亮山感激し、知

多四国開創を決意した。

弘法大師が知多の地に御上陸せられ、以後野間へ出て陸路西岸を北上され、名古屋(鳴海)へ向かわれた街道が、江戸時代後期になって『西浦街道』といわれ、知多半島主要街道のひとつであった。

現在その道路は整備拡幅され、国道２４７号線となっている。

※ ２０１１年発行の「常滑の街道」の冊子においては、『常滑街道』を『西浦街道』とも紹介されている。

樽水泉町地内の山の神グランド入り口の角地に、本宮山の石碑が二碑ある。一つは３メートルの高さの碑、もう一つは１メートル程の碑。いずれも本宮山の社標である。

大きい石碑は**“是ヨリ東二十二丁”**と記され、小さい石碑は方角を表す指の形が彫られ、**“本宮山道三十二丁”**と記されている。以前道路整備の際、他の　場所に建てられていたのが、都合によりこの場所にまとめられたと思われる。

樽水集落から本宮山までの道程二十二丁の距離については、周知しているところであるが、三十二丁の距離は、指で指し示した碑の方角から推定して、樽水の北側の地(保示地区)の『西浦街道上のある場所』と思われるが、定かではない。

※１丁＝６０間≒約１０８ｍ　（１間＝１．８ｍ）

(15) 樽水商店街の様子

〔小売店全盛の時代〕

樽水商店街は、常滑市街から続いて商店が建ち並び、常滑南部の商業地として発展していった。特に新居坂南から樽水橋、樽水郵便局、駐在所にかけての街道沿いに商店が集中していた。

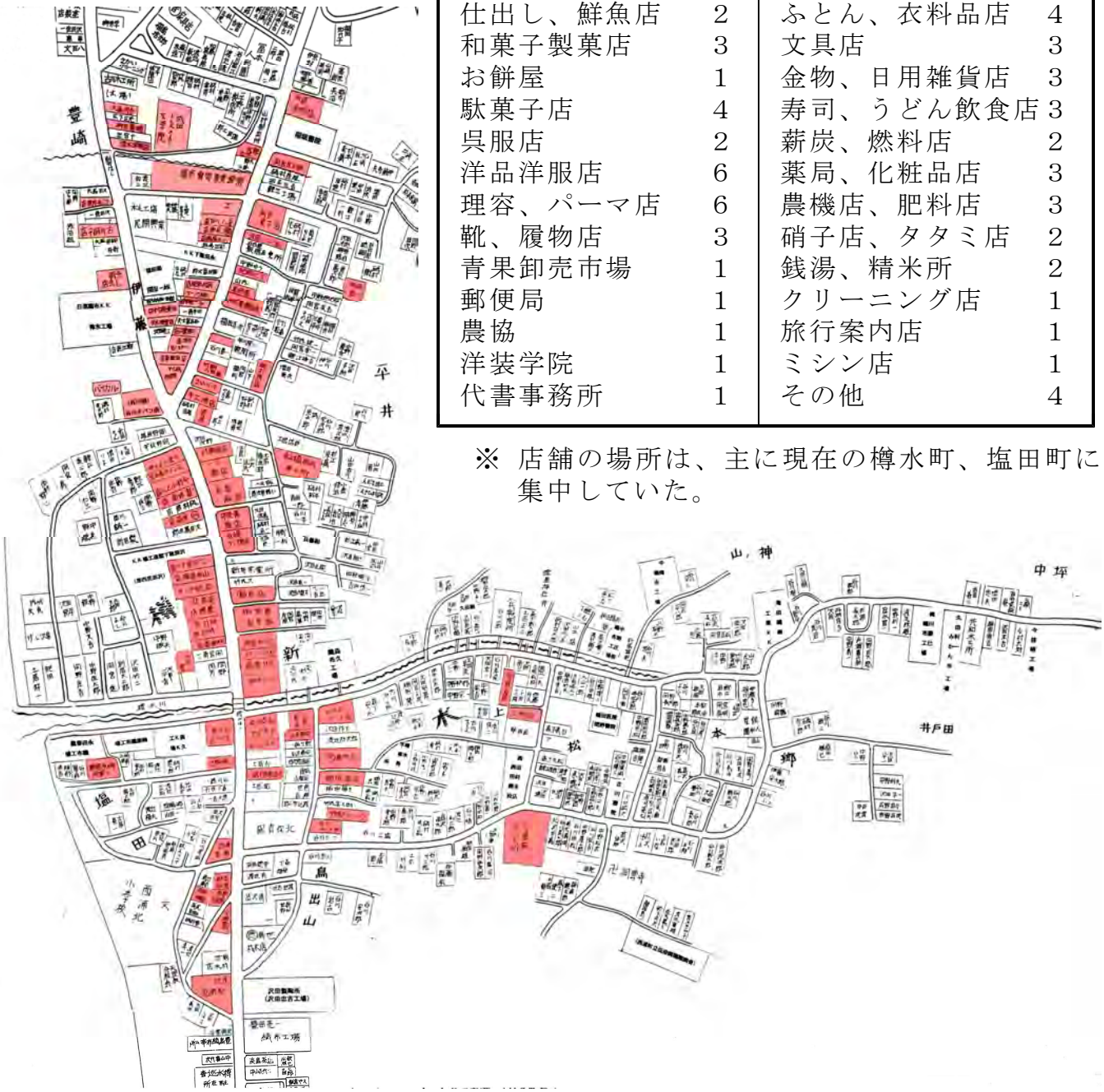
伊藤地区の最北部に『常滑青果卸売市場』があり、主に常滑市内の農家から各種の農産物が持ち込まれた。そして、市場の帰りに農家の主婦たちはそれぞれの商店に立ち寄り、樽水商店街は活気溢れる時代であった。

◆ 昭和35年から45年頃の樽水商店街の店舗数

八百屋	4	電機店、工事店	5
お米、酒味噌溜店	5	自動車、自転車店	2
精肉店、豆腐店	3	写真館、時計店	3
仕出し、鮮魚店	2	ふとん、衣料品店	4
和菓子製菓店	3	文具店	3
お餅屋	1	金物、日用雑貨店	3
駄菓子店	4	寿司、うどん飲食店	3
呉服店	2	薪炭、燃料店	2
洋品洋服店	6	薬局、化粧品店	3
理容、パーマ店	6	農機店、肥料店	3
靴、履物店	3	硝子店、タタミ店	2
青果卸売市場	1	銭湯、精米所	2
郵便局	1	クリーニング店	1
農協	1	旅行案内店	1
洋装学院	1	ミシン店	1
代書事務所	1	その他	4

※ 店舗の場所は、主に現在の樽水町、塩田町に集中していた。

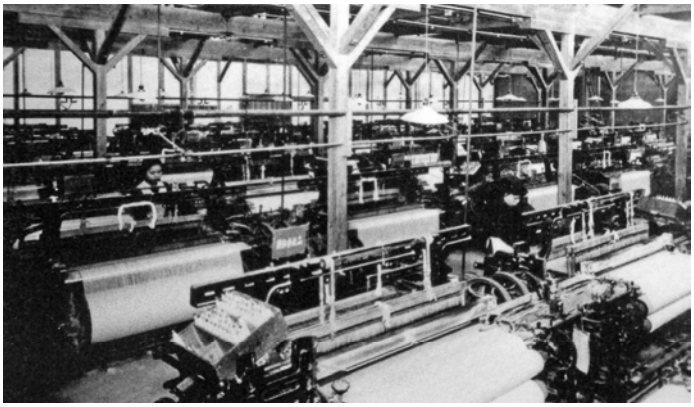
樽水商店街図



（16） 産業の繁栄について

〔織 維 業〕

西浦地区の木綿織布は、知多木綿に代表される。江戸末期、廻船問屋を営んでいた樽水村住人磯村源蔵氏らが、織布業の礎を築く。磯村家は昭和の時代『綿花屋』として名を馳せた。



かつての瀧田繊維工業の工場

◎ 樽水地区の織布工場

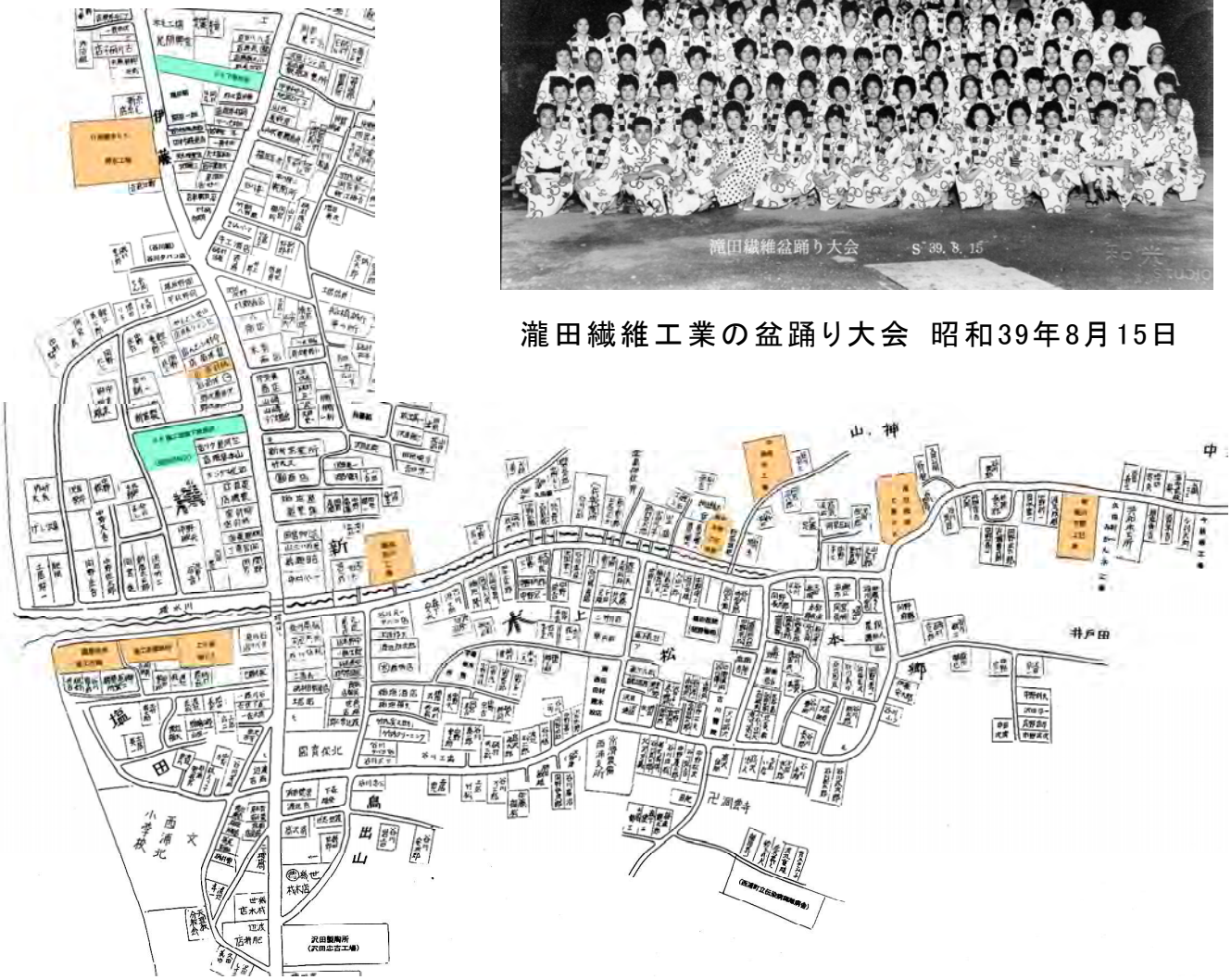
・瀧田繊維工業株式会社

常滑の廻船問屋『瀧田家』は、１９３７年(昭和１２年)織布工場を設置。

１９４４年(昭和１９年)、山ノ神地区に会社発足する。第二次世界大戦中の軍需工場として、兵隊用の晒の寝間着や下帯などを生産。戦後も晒を中心とする繊維生産業を営み、積極的に地方からの女子工員を採用し、多いときには１８０人を超え、当地区では最大の工場であった。

夏には、従業員総出の盆踊り大会が催された。右の写真は、東京オリンピックが開かれた年の記念写真。浴衣には、五輪のマークがデザインされている。

瀧田繊維工業の盆踊り大会 昭和39年8月15日



・その他の工場

日進織布工業株式会社　森久織布工場　榊原織布工場　中傳織布工場
永田春蔵織布工場　中野庄衛織布工場　梶川勝巳織布工場

◎ 樽水地区の靴下製造会社

沢辰靴下製造株式会社　　永田靴下製造工業株式会社

〔製 陶 業〕

西浦地区から常滑地区にかけて、山稜地帯には千に近い古窯址がある。この古窯址は平安の初期から鎌倉、室町にかけ、瓶・壷・茶碗等の類を盛んに焼いていた証と思われる。歴史の古さと規模の大きさにおいて、いわゆる日本六古窯中随一だといわれている。

この古窯址の創始は僧行基の指導によるものとか、あるいは加藤藤四郎が試し窯を焼いたのだとかいろいろな説があるが、先年(昭和２０年頃)、樽水の山ノ神地内より弥生式土器の出土があり、また須恵器に近い焼き方のものも出土しているので、事実は遙かに遠い昔からの古窯地だったようだ。

明治の末期、土管類、かめ瓶、小細工物、タイル等の生産が始まり、昭和時代に至り終戦後、モザイク、タイル、衛生陶器等の躍進目覚ましいものがあり、以降土管類、かめ瓶、輸出向け玩具、置物、鉢類、急須、茶器など常滑焼製品として現在に至る。

◎ 樽水地区の主な製陶関連事業所(昭和３５年～４５年頃)

・沢田(忠吉)製陶所　谷川巌製陶所　鯉江製陶所
間野舜園　中野陶園　山村製型所　鯉江製型所
森下陶苑　銀星園　新井窯業　マルヨシ　他
(後年には、輸出向け玩具・置物(ノベルティ)、鉢類、急須、茶器関連事業所多数あり)

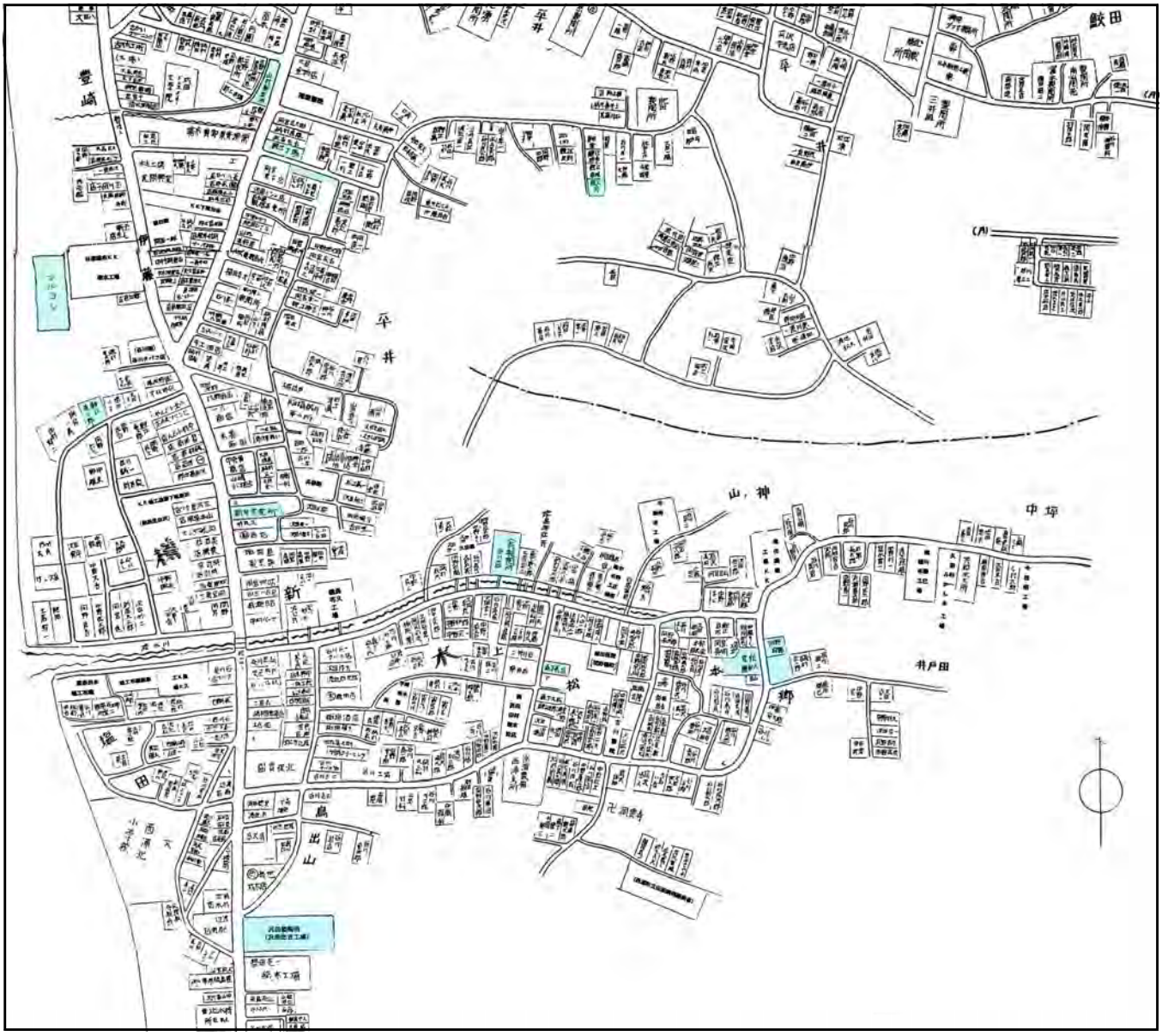
[ノベルティ]　輸出用の日用陶磁器で、犬や猫などの動物、人形、装飾用器などが生産され、主に北米、ヨーロッパに向けて輸出された。

輸出用ノベルティ（常滑中蔵）

・上記以外で、奥地の山中製土もあり。

昭和３０年代に入り、陶土としての採掘粘土の供給が難しくなったのと、土練機の開発が進み、当地区も三反田の東に、(資)山中製土が創立した。会社代表者でもあった中野勇夫氏は市議３期１２年を勤め、期間中困難を極めていた総パ事業の“着工”を持ち前の「決断力」で実現。

また、大相撲の世話人をしていたこともあり、新しい西浦北小学校のグランドに相撲場ができ、他校の自慢になっている。



◎ 帝国ホテルのスダレ煉瓦について ［ 沢田製陶所(現 忠吉製陶）］

東京の日比谷公園正門前の一角に造られた「帝国ホテル本館」。そのホテルの外壁にスダレ煉瓦と大谷石を使用して造られた建物はひときわ珍しく、道行く人びとの目を引いた。アメリカの建築家フランク・ロイド・ライト氏によるライト式建築として、最も有名であった。

このホテルの黄色いスダレ煉瓦を作ったのが、沢田製陶所(沢田平吉工場)である。明治から大正にかけて大土管工場として操業していた製陶所に、このスダレ煉瓦製作の要請が入り、大正６年９月から１１年１月にかけて製造する。

帝国ホテルより煉瓦製作にあたり、牧口銀司郎氏が製作所長として派遣され、牧口氏指導の下、鋭意製造された。また、技術顧問として、伊奈長三郎氏も協力された。

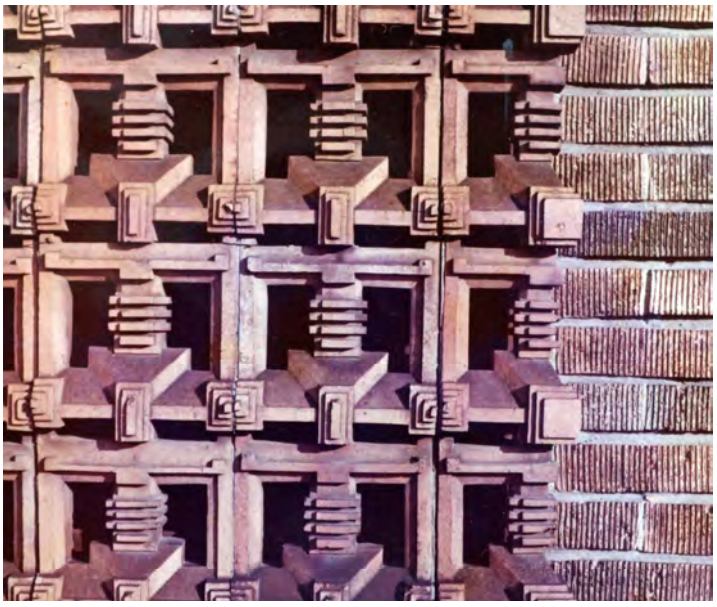
スダレ煉瓦に用いた粘土は、南知多町内海の内福寺の山の中から掘り出され、船によって、製陶所へ搬入された。当時製陶所の敷地は二千坪以上で、船着場まで続いており、建物面積も千坪以上だったといわれている。

新築された帝国ホテルは、１９２１年から１９６７年の間営業され、関東大震災や第二次世界大戦時にも、被害を受けることはなかった。

沢田製陶所の場主であった沢田平吉氏は、明治３９年枳豆志村の初代村長として尽力された。

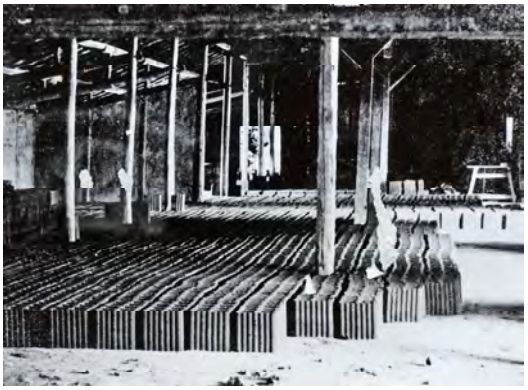
帝国ホテル全景

帝国ホテル玄関前

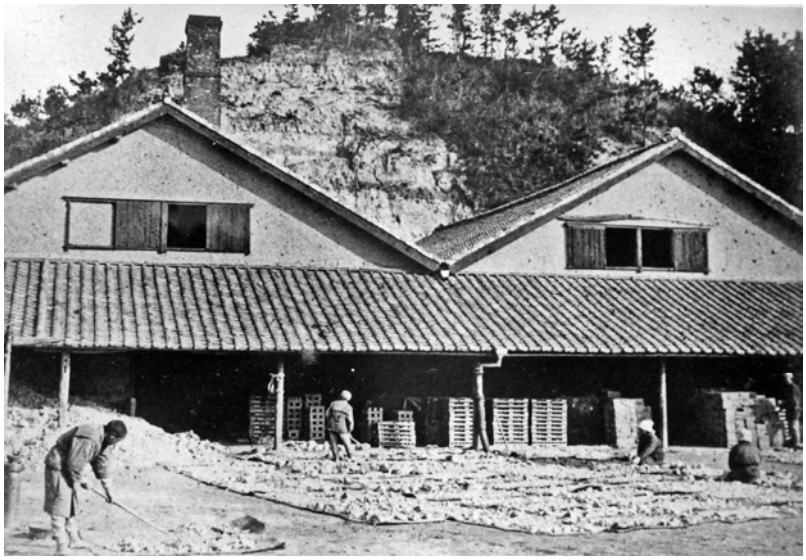


スダレ煉瓦の外装（右端）

スダレ煉瓦と大谷石の外装



帝抜き取ったままの穴抜き煉瓦



帝国ホテル煉瓦製作所(正面)

沢田製陶所長
沢田忠吉氏

技術顧問
伊奈長三郎氏

帝国煉瓦製作所幹部及び事務員　大正8年
前列右より 工場医 古川佐一郎氏 技術顧問 伊奈長三郎氏
工業主 牧口銀司郎氏　会計顧問 沢田忠吉氏
後列右より 技師 井上勤吾氏　工場長 水野徳三郎氏

建築家 フランク・ロイドライト氏(左)

帝国煉瓦製作所 当初開設　大正6年12月

帝国煉瓦製作所 幹部及び従業員 大正8年

〔農　業〕

◎ 昭和30年代から40年代の農業の歩み

戦後の復興は、やはり農業の力が一番の支えだったと思われる。大変な食糧難の時、農産物の生産は最も重要な課題であった。この時代、樽水の農地面積は、水田７０町歩(７０ヘクタール)、畑地３０町歩(３０ヘクタール)といわれていた。

水田は稲作のみの作付けが主体であったが、一部乾田化された水田では、裏作に、麦、菜種、馬鈴薯等も作られていた。畑では、市内において最大のみかん産地として盛んに栽培され、更に水田からの転作、山林の開墾などによって、みかん園が増反された。貯蔵みかんが主で、共同でまた個人で貯蔵庫を持ち、水稲とみかんによる複合経営の農家が多く、価格も安定していて、比較的裕福な農業経営であった。

農業組織の中心は、『樽水生産組合』であり、市や農協の対応もほとんどが生産組合が窓口になっていたのは、今も昔も変わっていない。当時の組合員数は、正准組合員数併せて１５０名を超え、農業専業化率とともに、市内では、三和地区(矢田、久米、前山)に次ぐ農業地区であった。

昭和４０年頃「明治百年」を迎え、“農業の曲がり角”といわれるようになり、経営規模の拡大、農業機械の導入による労働生産性の向上が求められた。農業技術の進歩も急速に進んだ。牛耕から耕運機やトラクターへ、人の手による田植えから田植え機による植付けへ、鎌による稲刈りからバインダー、コンバインによる刈取り、脱穀作業など、急激な進歩を遂げていった。

しかしながら、各種の農業機械の導入は、機械化貧乏を生み出す。そのため、若い農業者は、機械の共同購入・共同利用を試み、いくつかのグループが誕生する。その中で、１０人ほどで発足した共同利用グループは、三反田の東側、現在の調整池の場所に倉庫を設け、当時はなかったライスセンター事業も始めた。利用者は他地区からも多く、１シーズン六千俵を籾摺り調製した年もあった。現在の南部営農集団の原点が、この時期の共同利用グループである。

昭和４０年代は、国の政策で２件重要な施策があった。一つは、市街化と市街化調整区域の線引き、あと一つは農業振興法の制定であった。近代化街づくりの一環として、また農地の税軽減を目的とした施策ではあったが、当然、田や畑などを動産とみる不動産業界の考え方は、未熟な農家の財産管理に、戸惑いを感じさせた。

農業後継者については、当時樽水地区においては、比較的恵まれた状況で、人員もまずまずいて、市内における農村青少年クラブ(４Ｈクラブ)の運営も、主導的立場にあった。

時は流れ、昭和６０年代に入り、樽水地区も総パ事業が施工され、『バラ色の農業経営』を夢見たものの、農業情勢は毎年厳しくなり、若者の農業離れは進み、平成の世に入り、さらに厳しい現実にどれだけの農家が対応できるのか、考えさせられる今日である。

昭和42年 常滑市４Ｈクラブ員による稲作りプロジェクト

◎ 昭天皇陛下献上品の温室葡萄栽培農家『沢田農園(現 暁光園)』について

大正の初め、樽水のどこの農家も稲作りや麦作りに奔走していた頃、「沢田忠治青年」は、友人の紹介もあり岡山県へ果樹栽培の研修に行き、技術を習得。その後、樽水山の神地区の農地に、当時では珍しいガラス温室内での葡萄を実践する。

この時代には、ガラス板の納入が難しかったようである。幾多の困難を乗り越え品種の選定、栽培管理の高度な技術、そして栽培用地の環境(土壌、日当たり、換気、良質な地下水等)にも恵まれ、高品質な葡萄が生産された。

その後、本人のさらなる努力(土壌改良→堆肥の供給→家畜の飼養)によって、最高品質な葡萄と認められ、農園が昭和２年、『聖上陛下 御料品御指定葡萄栽培室』に認定され、**天皇陛下献上品葡萄**として、世間に知れ渡った。

みかん栽培にも取り組んだ
沢 田 忠 治 氏

聖上陛下御料品御指定葡萄栽培室としての御祈祷

聖上陛下献上品の葡萄

聖上陛下御料品御指定葡萄栽培室の内部　ーたわわに実る温室葡萄ー

明治・大正・昭和・平成　米価暦

米俵(60kg)生産者価格表

和　暦	価　　格	和　暦	価　　格	和　暦	価　　格
明治　元年	１円６９銭	４	４円３２銭	昭和３７年	４，８８２円
２	３　１３	５	５　２１	３８	５，０３０
３	１　８７	６	６　００	３９	５，６１０
４	１　１２	７	８　４８	４０	６，２２３
５	８０	８	１４　６０	４１	６，７４８
６	１　２０	９	２０　００	４２	７，７５２
７	１　８７	１０	１４　２０	４３	８，１１８
８	２　０５	１１	１０　２０	４４	８，１２０
９	１　１８	１２	１２　４０	４５	８，１６０
１０	１　３４	１３	１５　３０	４６	８，３１２
１１	１　９２	１４	１３　６０	４７	８，８８０
１２	２　６４	昭和　元年	１２　７０	４８	１０，２１８
１３	４　８０	２	１０　８５	４９	１２，４９１
１４	３　２８	３	１０　６０	５０	１５，５７０
１５	２　０８	４	１０　４０	５１	１６，３７２
１６	１　２５	５	６　２８	５２	１７，２３２
１７	１　８４	６	６　５０	５３	１７，２５１
１８	１　７３	７	８　２０	５４	１７，２７９
１９	１　５５	８	１０　８０	５５	１７，６７４
２０	１　４８	９	１０　８０	５６	１７，６７２
２１	１　４２	１０	１０　９０	５７	１７，９５１
２２	２　００	１１	１１　８０	５８	１８，２６６
２３	２　００	１２	１３　００	５９	１８，６６８
２４	２　６４	１３	１３　４２	６０	１８，６６８
２５	２　２８	１４	１６　２５	６１	１８，６６８
２６	２　６６	１５	１６　３０	６２	１７，５５７
２７	２　６６	１６	１６　５０	６３	１６，７４３
２８	４　００	１７	１６　９０	平成　元年	１６，７４３
２９	５　７２	１８	１８　４２	２	１６，５００
３０	４　１６	１９	１８　８０	３	１６，３９２
３１	３　２８	２０	６０円	４	１６，３９２
３２	４　００	２１	２２０	５	１６，３９２
３３	３　７６	２２	７００	６	１６，３９２
３４	３　７６	２３	１，４８７	７	１６，３９２
３５	４　９６	２４	１，７３５	８	１６，３９２
３６	４　３６	２５	２，０６０	９	１６，２１７
３７	４　３６	２６	２，８１２	１０	１５，８００
３８	３　２８	２７	３，０００	１１	１５，５２８
３９	５　２８	２８	３，２８０	１２	１５，１０４
４０	４　７２	２９	３，６１８	１３	１４，７０８
４１	４　９２	３０	３，９０２	１４	１４，２９５
４２	４　００	３１	３，９０５	１５	１３，８２０
４３	５　３６	３２	３，８５０		
４４	６　１６	３３	３，９６０		
大正　元年	８　３２	３４	３，９６０		
２	８　３２	３５	４，１１７		
３	７　２８	３６	４，２８９		

〔漁　業〕

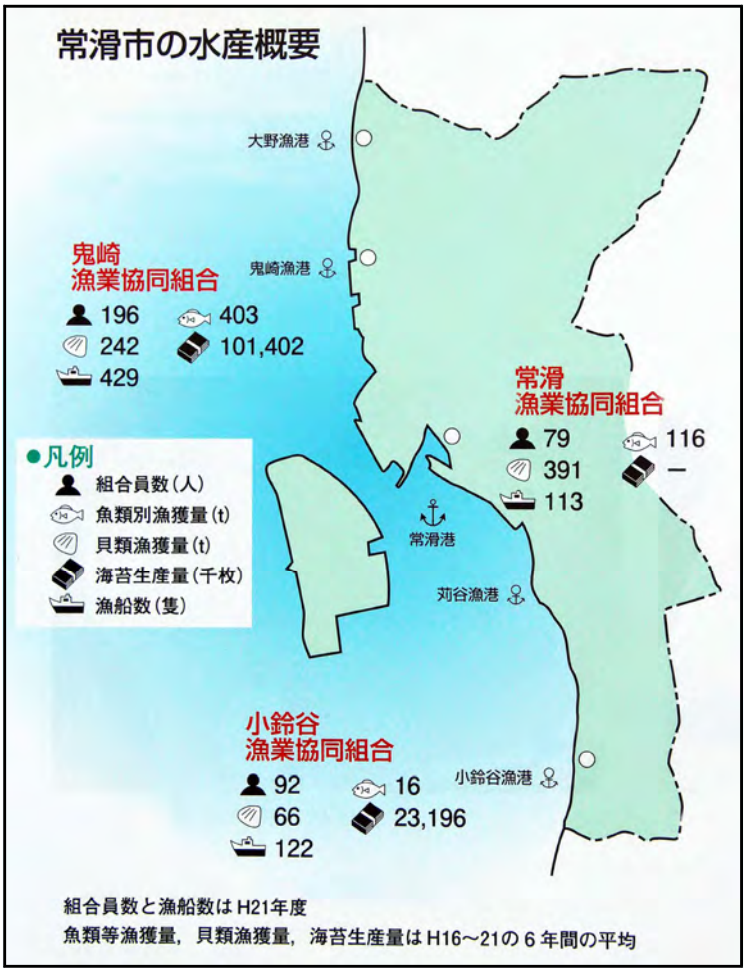
◎ 昔からの樽水の漁業について

西浦地区の漁業は、苅屋地区に代表される。元禄時代頃より、呉座帆を立て打瀬網漁業に出漁した史跡が現存する。苅屋の漁業は、明治の初期より逐年発展し、明治２５年には、大小漁船７０隻３４０人が従業していた。以後、小漁船に機動力を応用してますます発展し、大正末期より昭和１８年頃にかけて最盛期を迎えたが、大東亜戦争の進展に伴い、漁港、船溜まりの築造不能のため逐次漁船の数が減少し、終戦直後には２５隻程度となり、往古の漁場を偲ぶほどとなった。

その後、漁業法改定に基づき、発展の道程として沿岸漁業の水産である、あさり、はまぐりなど貝類の養殖、併せて天然海苔業から養殖海苔技術が確立され、大型乾燥機の開発も進み、育てる漁業が推進された。

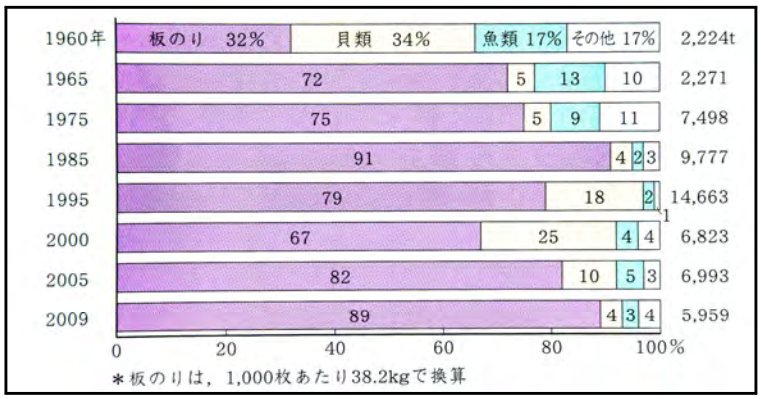
樽水の漁業も苅屋地区に順次して、昭和の初め、塩田の堤防や水門工事が進められた。以後、逐次港湾が整備され、漁業者も増えていった。魚類に応じ各種の網による漁法や釣り竿による一本釣漁法などで漁業者（漁師）も栄えた時期もあった。

また、あさりなどの貝類や海苔の養殖によって漁業関係者が増えていった。しかしながら、中部国際空港の開港に伴い漁場が使えなくなり、常滑漁業協同組合エリア内での漁場では、板海苔（養殖海苔）関連業者は皆無となった。



支柱漁場（海苔養殖）

放流事業（あさりの養殖）



常滑市の魚種別漁獲量割合の変化
（愛知農林水産統計）

〔土木建築業〕

◎ 樽水地区の土木建設業者及び地区内における主な事業内容

業　者　名	主な事業及び事業経過内容	備　　考
(株)兵善組 兵善生コンクリート(株)	樽水川河川改修事業 樽水港港湾整備事業 総合パイロット事業 西浦北小学校新校舎建設事業 樽水市営住宅建設事業 生コンクリート製造事業 その他各種公共事業	共同体
(株)谷川組	樽水公民館新館建設事業 ＪＡあいち知多農協 さわやか支店建設事業 その他各種公共事業	
久田組	西浦農協本店建設事業 一般住宅建設事業	熊野地区
福田組	一般住宅、純和風住宅建設事業 建築設計事務所事業	
西田建設	一般住宅建設事業 木材製材事業	
土居設計事務所	建築設計事業	さわやか支店
上記以外の一般住宅関連建築事業 個人事業主名 ・竹内実之輔　・沢田良平　・沢田景一　・鯉江治市		

◎ その他の土木建築関連業者名

・沢田市太郎　・谷川與三次郎　・谷川信秋
・沢田　進　　・竹中忠雄

［瓦　師］・谷川久松　・間宮孝雄

［材木業］・幾世材木店　・共和木工所
・尾陽興業(木毛工場)

［船大工］・テンマヤ・沢田平吉・沢田万助

※ 他に左官業者 数名あり

(17) 充実していた医療業務

◎ 樽水には三つの病院があった

◆ 古川医院

明治の初め頃より、本郷地区で樽水では最も早く開院する。古川左近氏、古川佐一郎氏、古川貞夫氏の三代にわたって医療業務に携わる。また、三氏ともに、行政政務にも手腕を発揮せられ、左近氏は枳豆志村時代、初代の樽水字総代を務めた。佐一郎氏は、村医・町医・校医を４２年間の長きにわたって務め、貞夫氏も跡を継ぎ、古川医院を守った。

古川医院
古川貞夫氏

◆ 稲垣医院

稲垣屋製菓舗の創業者、稲垣庄太郎氏の次男友三郎氏が、常滑地区に隣接していた新居地区に、稲垣医院を開院する。

以後、友三郎氏の跡は、本家の甥にあたる稲垣賢一氏が跡を継ぎ、昭和の時代、医院業務に精励した。

稲垣医院
稲垣友三郎氏

◆ 間野医院(植田医院)

西浦町長１０代目間野清太郎氏の子息(明治３７年生まれ)間野忠太郎氏は、東京帝国大学医学科在学中、「ビタミンB１の薬理作用」の研究で医学博士の学位を取得。

昭和１４年、大同病院副院長をしながら、本郷地区に二つ目の医院として開院した。古川医院が『外科医の雄』に対し、間野医院は『内科医の雄』として信望が厚く、人気の高い間野医院であったが、西浦中学校校医として診療中、脳出血にて急逝、享年４９歳であった。その跡を植田医院が引き継いだ。忠太郎氏の子息は、父親の遺志を受け継いで医師となり、現在、岐阜医療科学大学の学長を務めている。

間野医院
間野忠太郎氏

※ 昭和の時代、終わり頃には三つの医院も閉院となる。

現在は、昭和５０年代中頃に塩田町地区で開院した『こいえ内科』医院がある。また、歯科については、浅野歯科と森下歯科の二院があったが、「森下歯科医院」のみとなった。

◎ 伝染病隔離病舎（西浦町隔離病舎）があった時代

明治の中頃、医業に携わっていた古川左近氏らによって、保健衛生上の必要性が説かれ、恐るべき伝染病の発生を未然に防ぐという業績を上げることができた。

当時の食生活の習慣が起因し、大正１２年、腸チフスの流行もあり同１４年、西浦町役場に隣接して、西浦町隔離病舎が建設される。

時は流れ、震災や戦禍を経て、昭和２４年、**樽水洞雲寺の南側、西阿野字西御堂地内**に、伝染病隔離病舎が新設された。

以前の隔離病舎は随時移動され、チフス、赤痢（疫痢）伝染病患者の隔離がなされた。

(18) 良質な地下水が豊富だった山ノ神地区

樽水の祖先が、歴史をさかのぼれば弥生時代より住んでいた場所が、「山ノ神」であった。北側に小高い山を背負い、山方字のみたけ公園から東へ続いている山並み。
その南面山裾の下から湧き出る『御水』は水質もよく、人びとの飲料水や生活用水として重要な役目を果たした。そしてまた、諸産業の繁栄にも大いに寄与した。

◎ 取り井戸の飲料水として必要だった『御水』

昔から、上松地区・本郷地区は水質が悪く、飲料水として不向きだった。そのため樽水字や関係者等熟慮の結果、山の神地区より各家へ水を配給することとなった。
道路に配管し、山の神の山裾に井戸を掘り、ハンド式汲み揚げポンプを利用し、当番制で各家の井戸ガメに『御水』を配給水していた。

昭和２０年頃、山の神地区にあった「瀧田繊維工場」が工場拡張工事をする際、誤って取り井戸の配管(土管)をこわしてしまい、違う場所に配管している時に、弥生時代の遺構**“山之神遺跡”**の歴史的発見につながった。

◎ 産業の繁栄に貢献した「山の神」の地下水

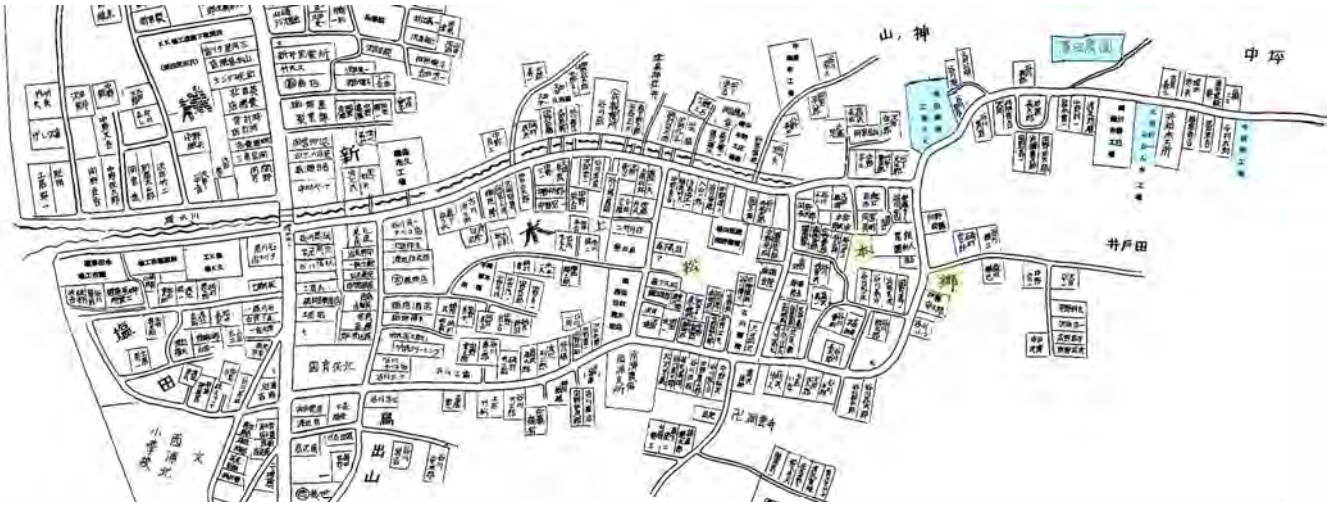
〔良質な実時を必要とした晒工場〕

・会社として、瀧田繊維工業(株)　　・個人事業者として、今枝晒工場

〔みかん水の精選水や農産物の生産に利用〕

・久田利一みかん水製造所　　・陛下献上葡萄生産の澤田農場

瀧田繊維工場の跡地(山の神グランド)と背後に連なる山並み



３　郷土の功績者･文化人･首長者調べ その他について

(19) 特筆すべき功績者について　(西浦町史 功績者調べより抜粋)

◎ 谷川由太郎 氏

谷川由太郎氏

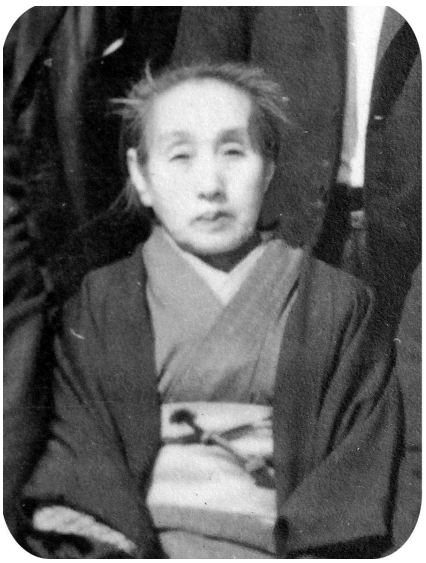
氏は、農業振興と公共の福祉増進のため、農業組合の設立運動に熱中し、明治４２年５月、枳豆志信用購買販売利用組合を設立、初代組合長に就任。良好なる業績をあげ、他に模範を示しつゝその運動を継続した。その当時、日間賀島に出動し、目的達成に努力した結果、島の人たちより「王様」の称号を与えられた。

また、明治の末期より昭和の初期に至るまで、十年一日の如く尽瘁した功労により、産業組合中央会及び県支会より表彰を受けた。また、合併直後、公設消防組の組織を力説し、組織とともに初代組頭に就任、よく性能発揮に努力した。

なお、町会議員二期当選し、自治体の発展に貢献した。その他種々なる公務に関与、尽瘁した功績者である。

特筆すべきは、１８歳の時より村農会、県農会の役員、知多郡農会長、県信用組合連合会、知多郡部会理事、知多郡産業組合連合会等を歴任。農家の福祉増進に寄与し郷土の誇りとする努力者である。

◎ 古川ゆき 氏



古川ゆき氏

氏は、町内女性として、代表的光彩ある存在で、父君佐一郎氏とともに､社会事業や自治体の発展に尽瘁され、その功績は実に顕著である。

日支事変、大東亜戦を通じて、国防婦人会西浦分会長として、銃後援護事業、戦後の悲惨な状態にあった戦病死者遺家族に、親子でも望まぬ慰安に、家庭訪問を涙をもって受け入れる感謝の情景を偲ぶことができる。

誠に熱情ある愛護に努力された。

また、民生事業として青少年の育成保護、受刑者の世話、社会事業として生活改善自治体の健全なる発展に、寝食を忘れて尽瘁されたのである。

さらにまた氏は、愛知用水の実現にも常滑市の代表として、樽水の谷川忠三氏(谷川由太郎氏の子息)とともに、終始運動の中心として活躍された。幾多の要職に就き、県下社会事業の大功績者である。

◎ 上記以外の功績者

◆ 谷川清太郎 氏

谷川清太郎 氏

氏は、町会議員を歴任すること２９ケ年にして、合併以来、最長期にわたる在任者である。その間、合併町村の通弊である部落観念一掃に終始一貫して尽瘁。ことに小学校及び役場の新築、道路の改修等、その他複雑な町政運用に支障を生ずる問題等々、事件に対処するにあたり、氏特有の智謀をもって問題の解決に当たり、献身的努力を傾注し、自治政発展の基礎を樹立した功績者である。

◆ 西田乙次郎 氏

西田乙次郎 氏

氏は、樽水村当時より地方行政に関与し、町会議員に当選すること四期間､自治体の進展に多大なる貢献をなした。ことに大正７年、町長として就任するや、小学校新築に関連する問題にて、先決事項として校舎の新築を行い、育英の刷新をはかり、「父兄に安心感をあたえるにあり」と決心され、議会の協賛を得て、県下に類例のない学区制を設定、即時新築工事に着手した結果、憂慮した多年の懸案を解消して、町の発展に特筆すべき業績をのこした功績者である。

◆ 古川佐一郎 氏

古川佐一郎 氏

氏は、明治３７年、厳父左近氏の医業を継ぎ、明治４０年枳豆志村村医・校医となられ、以降実に４７ケ年の長きにわたる職責に尽くされた功績は多大である。

特筆すべき業績を紹介すれば、児童の寄生虫の駆除と、児童トラホームの絶滅のため、自費で洗顔投薬まで行い、絶滅を期せられた。

また、児童の体力向上に、「健康は足にあり」との信念に基づき、学校から二十二丁(約２．４㎞)の本宮山までの駆歩を奨励した。児童の体位は逐年向上し、昭和１６年・１７年・１８年、県下優良児十傑に入選した。

町医としては、疫痢患者の絶無を期するため、グミの実の疫痢に及ぼす影響大なるに鑑み、町当局に進言し、同木の伐採をはかったことなどが挙げられる。昭和２７年に、県下において教育功労者としての最高の表彰を受けられた功績者である。

〔文化著名人について〕

◎ 稲垣隆吉氏(釣月)について

稲垣隆吉(釣月)氏

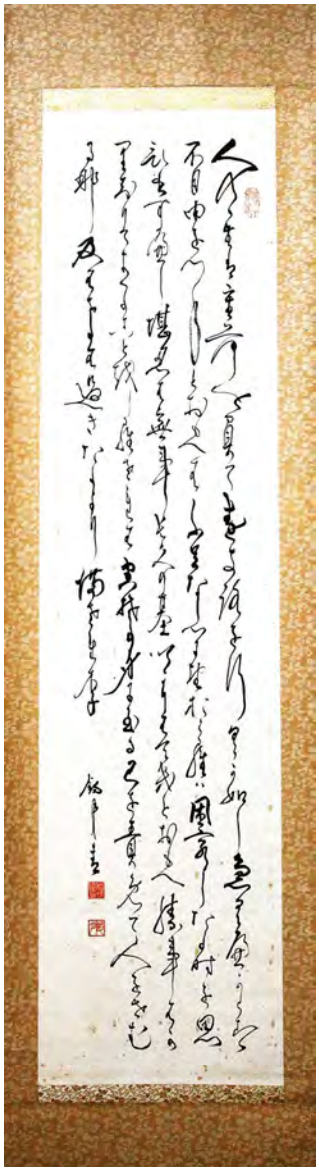
氏は、１８９５年(明治２８年)、美浜町奥田に生まれる。幼少期より絵画・書道に秀で、青年時代、京都の美術学校に学ぶ。その後、妻君となったとう氏と出会い、相思相愛の後、樽水本郷地区の農家稲垣家の婿養子となる。

農作業の傍ら、『絵画』『書』の勉学に励んだ。近隣の方たちや知り合いのだれかれ隔たりなく、要請に快く応じ、掛け軸、唐紙、屏風や色紙に至るまで、絵や書を書き続け、大いに喜ばれる。

昭和３０年には、樽水の字総代(現区長)も歴任する。氏は、持ち前の知能と陽気さを兼ね備え、昭和の“小林一茶”と呼ばれた。

谷川由太郎氏の肖像画
ＪＡさわやか支店二階に
今も掲げられている

観音様の軸
谷川兵八氏 所有



徳川家康「遺訓書」
土屋文彦氏 所有

洞雲寺 慰霊碑
碑の下部左に「釣月書」の刻印

（20）歴代の市町村長及び樽水字総代 区長名一覧表

① 歴代市町村長 一覧表

・枳豆志村 西浦町 常滑市

市町村区分	就任年月	氏　　名	住　　所
村　長　（一代）	明39年 9月	澤 田　平 吉	樽水字上松（塩田町）
（二代）	41. 12	澤 田 富次郎	
村　長　（三代）	44. 1	澤 田　次 郎	
町　長　（一代）	大元. 10		
（二代）	大元. 10	岩 田　鶴 松	
（三代）	4. 10	滝 田 文三郎	
（四代）	7. 1	西 田 乙次郎	樽水字塩田（塩田町）
（五代）	10. 7	澤 田 儀平治	
（六代）	13. 10	間 野 繁五郎	樽水字本郷（井戸田町）
（七代）	昭 4. 1	滝 田　慶 二	
（八代）	4. 9	間 野 由太郎	樽水字上松（塩田町）
（九代）	12. 9	澤 田 儀平治	
（十代）	15. 12	間 野 清太郎	樽水字本郷（井戸田町）
（十一代）	19. 12	竹 内 齊次郎	樽水字上松（塩田町）
（十二代）	20. 5	山 本 文次郎	
（十三代）	21. 3	豊 田　亮 一	
（十四代）	22. 4	幾 世 竹三郎	樽水字新居（樽水町）
（十五代）	26. 4	久 田　慶 三	
市　長　（一代）	昭29. 4	伊 奈 長三郎	
（二代）	30. 4	滝 田　次 郎	
（三代）	34. 4	久 田　慶 三	
（四代）	54. 4	庭 瀬 健太郎	
（五代）	62. 4	中 村　克 己	
（六代）	平 3. 12	石 橋　誠 晃	
（七代）	19. 12	片 岡　憲 彦	

② 樽水 歴代字総代 区長 一覧表

就任年月	氏　名	就任年月	氏　名	就任年月	氏　名
明39年 7月	古川左近	昭28. 4月	沢田米吉	昭61. 1月	山本　久
39. 7	沢田　忠左ェ門	29. 4	増田佐一	62. 1	沢田邦夫
42. 2	磯村源蔵	30. 1	稲垣隆吉	平元. 1	高沢正明
42. 12	磯村常太郎	31. 1	沢田忠治	2. 1	土屋文彦
大 3. 4	稲垣喜三郎	33. 1	中野佐吉	3. 1	中野宗衛
5. 4	竹内島三郎	34. 1	渡辺儀三郎	4. 1	沢田哲雄
7. 4	村瀬寅吉	35. 1	鯉江英三郎	5. 1	幾世孝一
9. 4	間野由太郎	36. 1	大塚房吉	6. 1	今枝重夫
11. 4	間野清太郎	37. 1	渡辺仙三	7. 1	沢田　浩
13. 4	幾世与三松	38. 1	中野宗吉	8. 1	中野秀昭
14. 1	間野竹松	39. 1	谷川康二	9. 1	沢田精一
14. 4	渡辺儀平治	40. 1	沢田愛二	10. 1	鯉江　豊
昭 2. 4	中野宗一郎	41. 1	土屋栄蔵	11. 1	谷川多喜夫
4. 4	幾世竹三郎	42. 1	中野松次	12. 1	中野元博
6. 4	谷川定吉	43. 1	幾世啓資	13. 1	加藤克平
8. 4	竹内斎次郎	44. 1	田中洋平	14. 1	田中克典
8. 9	鯉江重利	45. 1	中野万太郎	15. 1	福田泰造
10. 9	間野清太郎	46. 1	森下　武	16. 1	古川貴順
12. 4	幾世竹三郎	47. 1	谷川芳雄	17. 1	土居忠史
14. 4	竹内斎次郎	48. 1	新居富親	18. 1	谷川判治
16. 4	中野宗一郎	49. 1	間野由和	19. 1	西田久夫
18. 4	沢田辰次郎	50. 1	土居利吉	20. 1	谷川忠則
19. 4	森下要一	51. 1	谷川一平	21. 1	幾世康裕
19. 8	土居喜之助	52. 1	中野敏美	22. 1	土居佐吉
20. 5	谷川忠三	53. 1	中野義雄	23. 1	谷川豊隆
21. 4	永田文治	54. 1	土居　寛	24. 1	中野圭亮
22. 4	西田幸太郎	55. 1	稲垣竹夫	25. 1	籾山英治
23. 4	新居萬三郎	56. 1	谷川洋明	26. 1	土居定男
24. 4	谷川彦一	57. 1	谷川兵八	27. 1	田中善文
25. 4	中野　弘	58. 1	森下義治	28. 1	清水和男
26. 4	沢田民四郎	59. 1	沢田忠雄		
27. 4	榊原幸作	60. 1	土居健一		

☆ 明治時代は「枳豆志村」　大正元年～昭和29年は「西浦町」‥‥この時期は、樽水の首長を『字惣代』と言った。

昭和29年 町村合併して「常滑市」になり、『区長』と言うようになった。

(21) なつかしの写真 西浦小唄 民話 川柳 俳句

〔懐かしい思い出の写真〕

大正の終わり頃 樽水を構築された先人たち

昭和17年 間野清太郎町長 片岩芳一
校長を囲む 学校関係者

農繁期託児所（洞雲寺）前列中央 古川ゆき氏

昭和25年 西浦北小学校教職員
西浦町 樽水字関係者の皆様

昭和22年のお祭り

昭和21年のお祭り

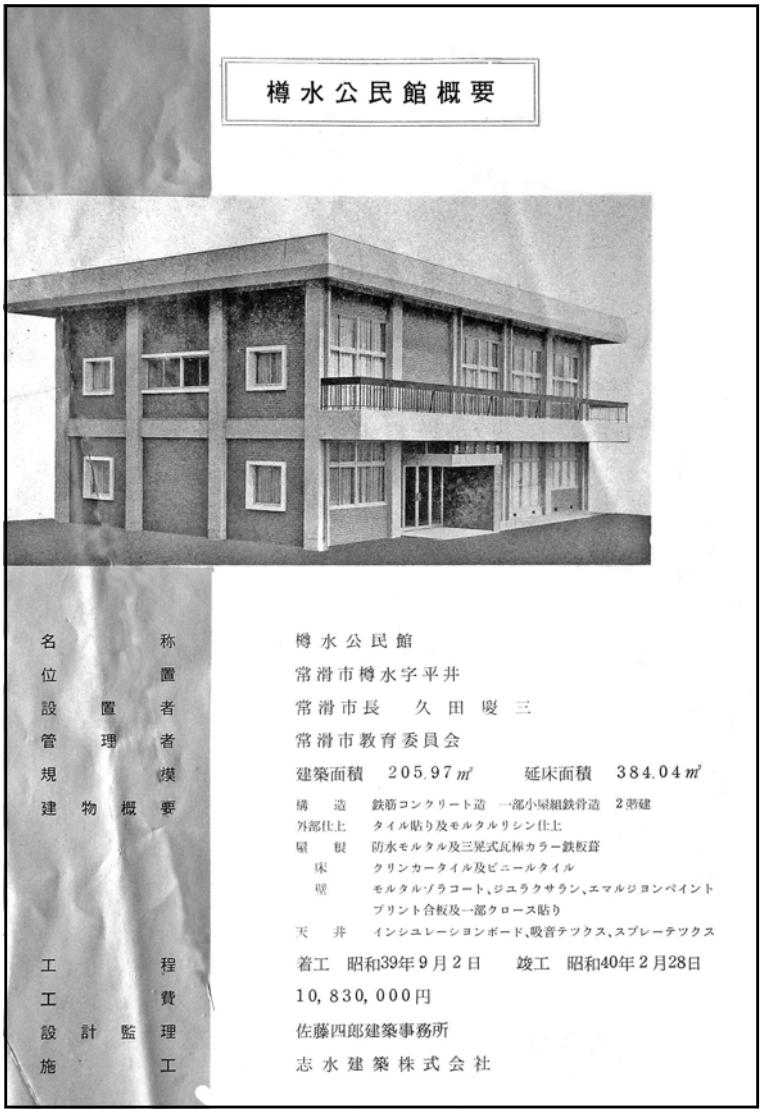
山車を引いたあとは、西浦北小学校に
集い、記念撮影

昭和27年度 町民運動会優勝の字役員と選手たち

昭和40年度 市民運動会優勝の区役員と選手たち

西浦北保育園児　昭和44年7月　「アポロ11号月面着陸」を記念して 撮影会

樽水の最北部にあった『成田ドレスメーカー女学院』の生徒たち



樽水公民館概要

名称	樽水公民館
位置	常滑市樽水字平井
設置者	常滑市長　久田慶三
管理者	常滑市教育委員会
規模	建築面積　205.97㎡　延床面積　384.04㎡
建物概要	構造　鉄筋コンクリート造　一部小屋組鉄骨造　2階建 外部仕上　タイル貼り及モルタルリシン仕上 屋根　防水モルタル及三晃式瓦棒カラー鉄板葺 床　クリンカータイル及ビニールタイル 壁　モルタルゾラコート、ジュラクサラン、エマルジョンペイント プリント合板及一部クロース貼り 天井　インシュレーションボード、吸音テックス、スプレーテックス
工程	着工　昭和39年9月2日　竣工　昭和40年2月28日
工費	10,830,000円
設計監理	佐藤四郎建築事務所
施工	志水建築株式会社

『樽水公民館の概要』を記したパンフレット

樽水公民館使用規程

1. 公民館を使用しようとするものは、次の事項を具し館長の許可を受けなければならない。
   イ、使用場所、種類の別　　ロ、使用の目的及び方法
   ハ、使用者の住所氏名職業　　ニ、使用人数
2. 公民館の使用については、次の使用料を徴収する。
   ただし、公共のための使用するときは使用料を減免することが出来る。（当分の間半額とする。）

区別		午前中 8.30～12.00	午后中 12.00～17.00	夜間 17.30～22.00	一日 8.30～22.00	基準式
一階	大会議室	300	500	700	1000	3000円（神宮前氏会長）
	図書室	200	300	500	800	300（部料）
	家政室	500	700	1000	2000	一階大会議室、二階ホール会議室相談室を使用 時間－2時間
二階	ホール	500	800	1200	2000	
	会議室	300	500	700	1000	
	相談室	200	300	500	800	

3. 使用者は建物及び備品を使用中に毀損又は滅失したときは、館長が定める金額を弁償しなければならない。
4. 前項のほか、使用者は使用中に生じた事故に対し、一切の責任を負わなければならない。
5. 燃料費、湯茶、電話料等は使用者の負担とし実費を徴収する。
6. 許可を受けたものは次の事項を厳守しなくてはならない。
   イ、使用権を譲渡または転貸しないこと
   ロ、使用許可のない場所並びに廊下には立入ったりしないこと
   ハ、危険物や凶器、動物等を携行しないこと
   ニ、公共の秩序風紀をみださないこと
   ホ、承認なくして館内で物品を販売しないこと
   ヘ、前項の外館長の指示すること
7. 使用者は使用した器具を整頓し、且つ室の内外を清掃して次室の使用に支障なく係員に引渡さなければならない。

『樽水公民館の使用規定』

樽水公民館が開館

昭和４０年 待望の樽水公民館が創建開館する。当初は結婚式場として、また、各種の発表会や会合にも大いに利用された。

昭和４３年 浜松４Ｈクラブ員との交換会

昭和４２年 常滑市農村教育青年会議による実績発表会

西浦地区敬老会(樽水・西阿野地区合同開催)　　平成１８年９月１７日

南陵地区市民運動会〈優勝〉　　平成１８年１１月２日

盆踊り大会　厄才・アトラクション　　西北小・トーチトワーリング　平成２０年８月１３日

〔民　話〕

はす池伝説より

磯 村 政 乃

土地改良で今は直線道路に変わってしまいましたが、昔の樽水の奥の方は小さな山や谷がいくつもあり、道が曲がりくねっていて、それぞれに名が付けられていました。
当時の三反田を曲がり竹林の裾を抜けると、「国彦さの清水」があり、道行く人のオアシスになっていました。澄んだ冷たい水が甕に落ち、縁の欠けた茶碗が置いてあり、あいさつしながら誰でも迷うことなく喉を潤していったのです。

そこを過ぎると浅い谷があり、突き当たりに小さな池があったのです。「たのけの池」と言い、小さな洞穴がいくつもあって、狸が生息していたようです。捕らえようとして入口で火を燃やし、煙を穴へ入れて反対側で網を張って番をしたそうです。狸えぶしと言って、昭和の初め頃まで行われていたようです。

それとは別に、たのけの池にはもっと昔、織田軍と今川軍の戦の折、高讃寺の僧兵が匿したのでしょうか、太刀や槍が束ねられて沈めてあったと言うことです。暑い夏の日、池の水を抜き、かいどりを行って大量に投げ込まれた兵器を見つけた池の持ち主は、どんなにびっくりしたことでしょうね。

そして、それよりずっと前のこと、高讃寺が七堂伽藍三百坊の大寺院だった頃、都から公家のやんごとなき姫君がはやり病の疱瘡にかかり、行基上人の教えを守る高讃寺へ救いを求めて落ちて来ました。しかし、女人禁制の寺へ入れず、西御堂に籠もり野の花を愛で、付き人と淋しく暮らしていたのです。

そのうちに里の青年と恋に落ち、そこにも居られなくなったので、ひとつ山を越えた十貫堂山の麓の小さな池のほとりに庵を結び、付き人と読経三昧の暮らしであったようです。慰めは都から送られた蓮の根が増えて、初夏から花開く白蓮であったと伝えられています。
その年の中秋の名月は、雲ひとつない群青の空に、山から昇る月の清らかな黄金色。付き人の呼びかけにも答えず、立ち尽くす姫。いろりに火をくべた付き人が外へ出てみると、姫の姿がありません。むら雲が流れ、目の前の池に大きく水の輪が広がってきます。半狂乱の付き人の声はこだまして、夜は更けていきました。

あくる朝、高讃寺からの応援で、白衣の袖に石を入れお腹をしっかり抱えた姫の姿が蓮の根方に座していたと伝えられています。
その後も白い蓮花は咲き続き、誰言うとなく「はす池」として人びとに言い伝えられています。

今はもう本宮山(昔の十貫堂山)の姿を映す水もなく、小さなどんぼちとして形だけは残っているのでしょうか。(現在は、田畑となっている)

〔伝　承〕

三代目の語り

私が「五右さ」へ奉公に来たのは十四の時です。もう大正も終わる頃でした。その時すでに、ごえさの酒素まんじゅうは評判がよく、俗にいういい家のお得意さんが付いていました。

通称五右さ。正しくは稲垣屋製菓舗の創業は、明治四年で初代は庄太郎という人です。子供の無かった、稲垣五右衛という人に大高から養子としてもらわれたのが、五才になったばかりの庄太郎だったのです。八人兄弟の三人目で、当時は子だくさんの家から、子の無い家へもらわれるのは、ごくあたりまえのことで、養父母を大事に世話するのも、また当たり前のことであったのです。

律儀で働き者の養父を助けて、庄太郎は、十五の時から船に乗ったのです。明治の初期、知多の海岸には、この土地で産するもの、たとえば土管や木綿などを、大手の回船問屋が取り仕切り、海を渡って商売をしていたのです。このたるみの村にも、「源蔵さ」という回船屋があって、養父五右衛は、そこの四日市通いの、土管船の船頭をしていたのです。さほど大きくもない船に、土管を積めるだけ積んで、東から西へ伊勢湾を横断していたのです。凪の日ばかりではありません。鈴鹿おろしをまともに受けて、沈む船もありました。

明治三年の秋の暮れ、難儀な北っぽをどうにかくぐり抜けて、やっとの思いで四日市へ着いた五右衛親子に、港の荷揚げ場近くで、店を開いている馴染みのまんじゅう店のおばあさんが言ったのです。「こんな若いええ子を船に乗せて‥‥。板子一枚下は地獄だがな。冬場でも海を渡らんならんこんな仕事は、一日でも早よやめて陸で商売しなされ。わたしゃ天白川ぞいで生まれて、ここへ流れて来たけんど、在所ゆずりのまんじゅうの作り方教えてやるで、もう二度と四日市へ来たらあかんでな」そういって伝授されたのが、今の酒素まんじゅうの作り方だったのです。

まず、もち米を炊く。ころあいをみて麹を入れ、温度を保って一晩ねかせる。それを絞った汁へ小麦粉を入れて煉る。それを皮にして、炭火でゆっくり煉りあげた餡を包み蒸しあげる。何度も何度も失敗を重ねて、やっと、得もいえぬ香りただよう酒素まんじゅうが出来上がったのです。はじめて見て、味わう、旨きもの。五右まんじゅうの評判が広まるのに、さして時はかかりませんでした。近郷では、初めてのめずらしさも手伝って、作るだけみな売れていったということです。

かくて、四日市通いの土管船の親子は陸に上がり、重くて冷たい土管運びから、温かくてやわらかいまんじゅう作りへの、商売替えに成功したのです。

庄太郎は、四人の子の父となり、長男には、自分の生まれた大高から、姪を嫁に迎え跡を

継がせました。次男は医者になり、大陸へ渡りましたが、不幸にも病気で、子を生さぬまま亡くなりました。娘も二人あり、一人は軍人さんに嫁ぎ、下の娘は裁縫が好きで、その道で先生になっておりました。五歳で五右衛の養子となった庄太郎は、しっかりたるみに根を下ろし、五右衛の家を守り、子孫を残し、名物酒素まんじゅうを作り上げ、五右まんじゅうの名を定着させたのです。

時は移り、庄太郎の長男五一郎の代になり、その妻いとの縁戚のものとして、私が十四の時、大高から、たるみへ奉公に来たわけです。

十年余りの修業の後、体が弱く早世した五一郎の娘こうと結婚したのは二十五の時でした。三代目として、のれんを受け継いだのです。でも、養子ではありませんので、姓は土屋に変わりましたが、店の名は金輪際変えません。（幸い妻には弟があります。大陸で亡くなった叔父、友三郎の跡をたてて医者になりましたから、稲垣の姓は引き継いでくれました。）

私の代になってからも、戦前は苅屋の多賀神社の初午大祭の時などは大変で、宵宮から当日にかけて店の前を通る人びとがひきもきらず、大せいろで蒸しあげた湯気のおさまらない酒素まんじゅうが、作っても作っても飛ぶように売れていったものです。

落雁、蒸し菓子、上用、羊羹、カステラ等々、味は世につれ人びとに愛されるものも少しずつ変わってきましたが、この酒素まんじゅうだけは、永々と皆様に愛されていくでしょう。今でも一番早く売り切れてしまうのが、酒素まんじゅうですもの。

冷蔵庫のない時代、井戸へぶら下げておいた種子菌が、増えた井戸水に浸かってだめになってしまい、辛い思いをして菌を分けてもらったこともありました。

材料も道具も不自由な時代に、苦労して守り続けた味と技術も、今は四代目がしっかり受け継いでくれました。先代から自分へ、自分から後継者への伝承は、とどこおりなく終わったのです。もう安心です。

私も、もう歳です。寄る年波には勝てません。人間、生を受けてこの世に生かされるのは、それぞれに前世から後世への伝承者として、仕事をするためなのだと思います。

足腰が不自由になりましたが、妻と二人で好きなように老後を楽しんで、（頑固なのは、私の性分、焼かな直らんで、気まま言わしてもらうけど）もう少し、稲垣屋製菓舗を見守っていたいと思っています。

（一九八九年三月　土屋栄蔵）

これは、一九八九年三月に伺いました。少し足が不自由になっておられましたが、しっかりとお話し下さいました。その後、風邪がもとで、一九九〇年九月二十八日、八十一歳でなくなられました。ご冥福をお祈りいたします。

俳句

渡辺貞子

寸ほどの千本幟初日の出
農繁期託児所は寺茸の飯
遠き日の茱の身桑実山野駆け
刈田後へ暗渠土管を子等運ぶ
藁砧打つは雨の日父寡黙

駆け登る本宮磴や玉の汗
掲示板記録書かれる秋の会
忠魂碑遊びは碑裏落葉積み
雪舞ふも八日産土神詣で
運動場総べて甘藷畠戦時っ子
弘法堂ぐるり縁側石蕗の花
日向ぼこ茅草根っこの甘かりし
霜やけっ子通学時は手を借して
温みほし友の住ひの日向ぼこ
母失して怪我の妹背にふらこを

川柳

沢田正司

縄文の土器にロマンがよみがえる
無名でも郷のお米が口に合う
回り道してふるさとの土になる
八月の空に浮かんだ晶子の詩
再会も別れも乗せて滑走路
松茸も秋刀魚も鯛も多国籍

西浦小唄

作詞　磯村碧浦
作曲　平野秀一

一、春は色よくかすみをそめてヨ
仁王古き高讃寺（サテ）
知多文化の発祥地
寺のいらかにチョイトいらかに桜散る

二、夏は涼しやしぶきをあげてヨ
ながめうるわし伊勢の海（サテ）
真帆片帆のいさり舟
沖のかもめにチョイトかもめに波おどる

三、秋はめでたや稲穂も黄金ヨ
守る神は多賀神社（サテ）
お米自慢に酒自慢
陶焼く煙はチョイト煙は空焦がす

四、冬は鈴鹿おろしに西日が映えてヨ
見上げる山は本宮山（サテ）
おさの音も高らかに
知多木綿のチョイト木綿の織りどころ

(22) 歴史研究会会員のことば

「樽水のむかし」発刊に寄せて

常滑市議会
議長　加藤久豊

「樽水のむかし」の発刊、誠におめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

さて、樽水地区の歴史始まって以来の大作となったこの区史編纂の発端は、平成２７年夏ごろ、区長経験者である中野秀昭氏が、常滑市教育委員会発刊の「中学校社会科資料集・身近な地域」（平成２４年から２７年版）を目にした事から始まりました。

この副読本には、樽水地区にあった「山之神遺跡」の存在を明確に示し、常滑市民俗資料館蔵の磨製石剣が写真で紹介されていました。現在、「山の神グランド」として区民の皆様に活用頂いている場所に遺跡が存在していることに、深く感銘を受けたとお聞きしています。

そこで、中野氏のお声掛けで、地域在住の見識者が結集し、地域の歴史の掘り起こし調査や区史編纂制作に向けて、作業がスタートしました。

調査を進めていく中、これまで埋もれていた地域の歴史や後世に伝えるべき発見など、編集会議を重ねるごとに示される新たな事実に、驚く事ばかりでありました。

歴史を作ってきたのは「必死の一人」からと言われます。今回、発刊された区史編纂誌「樽水のむかし」は、まさに後世に語り継がれるべき樽水区の歴史の集大成であり、永久保存版であります。

「樽水のむかし」が完成したことは、まさに称賛に値する事であると思います。

次世代に伝えることの大切さや地域を愛することの素晴らしさをご教示いただき、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

終わりに、今回の編集に当たり、編集委員としてご尽力いただきました関係者の皆様に感謝申し上げ、お祝いの言葉と致します。

受け継がれて行くもの…

御嶽山洞雲寺
住職　磯部順基

「この樽水という処は偉大なところでね…。祖先が残した生き様を始めとして、弥生時代からの遺跡や帝国ホテルのレンガ、天皇陛下に献上した葡萄などがある場所だという事を知らない人が多くなる前に冊子にして残しておきたいんだよ…」と、母親、中野たまさんの二十三回忌の法要を依頼されながら、ご自身で調べられた家系図を元に、代々、受け継がれて行くものの素晴らしさを熱く語られた中野秀昭さんが、樽水の歴史研究会を創りたいと言葉をかけていただいたのは、平成二十七年の七月のこと。

「私も樽水の歴史は知っておきたいので、お仲間に入れていただけませんか…」と申し上げ、是非とも会場はこの樽水の字寺の洞雲寺でという旨を述べますと、「おっさまとわしが発起人だから、こちらこそお願いしますよ」と、頭を下げられて、発足したのが十月でした。

ＩＴ時代と呼ばれる今日ですが、大切な情報や身体で味わう感動は「お伺い」という言葉を交わしながら得るものでなければ腑に落ちません。この「樽水」の歴史の真髄は、インターネットではいくら検索しても見当たりません。

図書館に所蔵の郷土史を元に、長老の方々に何度も頭を下げて、「昔の写真はないか」、「この人物は誰なのか」と何度も足を運んで得た情報をたよりに、中野秀昭さんが舵取りをし、西田久夫さんが写真や文章をまとめて、想像以上の「樽水の歴史」が浮き彫りになりました。

二月の編集会議を開催する１時間前には、慶應三年三月二十三日にお浄土へと往生された中野秀昭さんのご先祖、善山道祐法子の百五十回忌の法要を勤めました。そのご縁でしょうか、その後、不思議な出来事が次々と起ったのです。

常日頃から目にしていた洞雲寺の中庭にある観音像の頭部は、「柴山清風作の護国観音として本宮山にあったものだ」と知らせてくださる方が現れたり、貴重な懐古写真が思いもよらぬ処から出現することなど…。驚きの連続と感動で、時間の経つのも忘れてしまうほどでした。とても人間の考えや計算では成し得ないことを、神仏のおはからいで導いていただいていると感じました。

どなたかがお浄土に往生されることを「息を引き取る」と申しますが、ただ、息が切れて死を迎えることではありません。「引き取る」には「受け取る」の意味がありますので、命を終えた故人の意志を受け取る、つまり、故人の思いを受け継ぐことが「息を引き取る」と教えていただいた方がありました。

この「樽水」で生まれ、育った私達はご先祖さまや先人の思いを受け継いでいるのでしょうか…。「人柄が家柄をつくり、家柄が土地柄をつくる」という言葉があります。また、「土地柄が家柄をつくり、家柄が人柄をつくる」という言葉もあります。この「樽水」の土地柄の素晴らしさを一人でも多くの方が意識して、受け継いで行くことが本当に大切なことだと感じております。

「歴史の語り部」となることを祈念して

常滑市文化協会
会長　西 田 久 夫

小冊子「樽水のむかし」の編纂に携わって得た収穫は、「私たち樽水の地は連綿と織りなす歴史と文化の誇り高い地域である」という偉大な事実です。そしてまた、この機会がなければ先人の労苦や偉大さを知ることもなかったかも知れません。世代間の断裂があらわになって久しい今こそ、そうした歴史の事実を見つめ、家庭で語り継いでいくことが大切だと考えるようになりました。

祖父が西浦町長時代、心労により倒れ、その後言葉が不自由になったということは、父から聞いて知っていましたが、身体を蝕むようなどんな職務の状況があったのかは、知る由もありませんでした。
「樽水の人たちが、毎晩のようにわしの家に鎌を手に、集まってきていたそうだ」、取材で訪れた稲垣屋の土屋文彦さんの口から漏れ聞いた言葉です。西浦第一尋常小学校をどこに新築するかで樽水、西阿野地区住民間の争いが、いかに険悪で危険な状況にあったのかがわかり、雷に打たれたような衝撃が走りました。祖父の置かれていた立場の過酷さを改めて知ることとなったのです。

また、いくつかの「小字名」は、新町名発足とともに消えていきました。私の子供の頃の住所は、「大字樽水字塩田」でした。西浦北小学校の西には、田んぼが広がっていました。そこは子供たちを惹きつけるおもしろい遊びの場でしたが、未だトラウマとなっている事件が起きました。
田んぼは、太い土管で直接海につながっていました。満潮になると田んぼに海水が入ってくるため、その境目には木枠があって、円筒形をした木栓(イル)がしてありました。満ち潮を待ってこの木栓を抜くと、鯨の潮吹きのように海水が吹き出てきて、実に壮観でした。ひとしきり遊んでからそのまま家に帰りました。
翌朝、親父に叩き起こされ現場まで行くと、田んぼは見事に海と化して、稲の穂先が見え隠れするほどになっていました。栓をするのを忘れたしまったのか、それとも締め方が緩かったのかは定かではありません。子供ながらにその昔、この一帯で塩を取っていたという証を見た気がしました。
また恐ろしかったあの伊勢湾台風時には、田んぼと海を隔てる護岸が破壊され、田んぼから家の庭先まで波が押し寄せてきました。まさに地名「塩田」なるゆえんに得心がいきました。

現在、泉町に住んでいますが、やはり以前は「字山ノ神」という住所でした。近くに「山ノ神様」の祠があったということです。山ノ神は名の如く山を支配する恐ろしい女の神様で、俗に妻(かみさん)の異名にもなっているほどです。住まいの裏手は御嶽神社の山が迫り、おそらく田植えの頃になると、そのあたりから神様が田畑の方へに降りてきて、農作物の生育を見守ってくれるという信仰があったのでしょう。でも、その地名も残念ながら「山ノ神グランド」として残っているのみです。
三反田以東の小字名にも、地名の起源は興味深いものがあると思われます。もっともっと調べてみたいという欲求に駆られます。

ここに書き記したことは、取材をしてみて分かったことのごく一部です。この冊子が「樽水の語り部」としての役割を担い、歴史継承の一助となれば幸いです。

参考文献・資料提供・協力者一覧表

★ 『西浦町史』1955 西浦町史編纂委員会
★ 『常滑市史概要』1972　中澤三千夫
★ 『常滑市誌 文化財編』1976
★ 『常滑市誌』1976
★ 『常滑市誌 絵図地図編』1979
★ 『常滑市誌 近世絵図集』1979
★ 『愛知県史 資料編 2 弥生 考古 2』
★ 『大正 昭和 平成 御大典記念写真集』 ＝愛知県神社庁知西支部
★ 『昭和37年 常滑市居住者明細図帖』（樽水・常滑南部地区） ＝片岡貞光氏所有
★ 『帝国ホテルのスダレ煉瓦』読本 ＝牧口銀司郎 著（元帝国ホテル衣糧部主任）
沢田邦夫氏 所有
★ 『遷座祭記念写真集』樽水本宮神社 ＝谷川洋明 所有
★ 『セントレア 常滑から世界の空へ』＝谷川和親 著
★ 文化著名人‥‥稲垣隆吉氏『絵画 掛け軸（絵 書）』谷川兵八氏、土屋文彦氏所有
沢田正司氏『川柳』　磯村政乃氏『民話』　渡辺貞子氏『俳句』
★ 懐古写真提供の皆様方
★ 『常滑 －身近な地域－』　中学校社会科資料集
★ 常滑市『陶の森 民俗資料館』

樽水歴史研究会会員

磯村　章	土居健一
中野　稔	谷川洋明
澤田邦夫	澤田　浩
土屋文彦	西田久夫
渡辺義孝	加藤久豊
磯部順基	中野秀昭

編　集　後　記

冊子「樽水のむかし」は、昭和30年発行の『西浦町史』を参考資料として編纂に当たりました。樽水の歴史を探索しますと、先人の教えに、『西浦は常滑の知恵袋。西浦の中心は樽水である』と提起しているように思われます。今回、平均年齢７３．５歳の研究会員が作成に携わった「樽水のむかし」。一人でも多くの区民の皆様にご覧いただき、次世代の皆様により、『樽水のむかし 続編』の発刊を衷心より願う次第です。

「樽水のむかし」

監　　修　樽水歴史研究会
編集委員長　西田久夫
編 集 委 員　中野秀昭　渡辺義孝
加藤久豊　磯部順基
題　　字　西田久夫

発　　行　平成28年5月1日
樽水歴史研究会

印　　刷　誠進社

台付短頸壷

山之神遺跡（弥生時代後期）